アイズ「違います。好きになった人がたまたまショタだったんです」

鉤森

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

なかなか浮かばない本命小説とか、そろそろ終わりそうなのに浮かばない怪物の方とか。色々息詰まった結果また書いた吐き出し小説。評価次第で次回作。

題材に「なんでコレ?」とか言わないで。趣味です。甘いの読みたかったんです、書きたかったんです、彼らが好きなんです。大好きなんです。

色々見逃がして頭空っぽにして読んでください。

目次

その愛は、焔の如く（顔から火が出る的な意味で）――――――――1
咲き誇る華の如く（口内に広がる麻婆の比喩）――――――――14
あげていくぞ（糖度的な意味合い＋α）43
深紅に染めよ（フラグ立てていこう的な意味で）――――――――61
皐月の風は頬を撫で（ファミリアに吹き抜ける恋愛風警報）――――――――78
開け、黄金の劇場よ（悪神登場前からグロッキー会場の暗喩）――――――――97
天幕の飾りとなれ（今後の甘さの為に犠牲になれの意）――――――――123
見惚れよ（悪神のやらかした爪痕への皮肉）――――――――139
惚れ直すがよい（誰かからの目線での発言）――――――――158

その愛は、焔の如く（顔から火が出る的な意味で）

「雑魚じゃあ、アイズ・ヴァレンシュタインは釣り合わねえ。」

「アイズ。お前は俺とあのガキ、どっちをツガイにしたいんだ？」

宴もたけなわ、主神ロキ主催の「豊穣の女主人」にて開催された祝勝会の席での話だ。突如として吐かれた、酔いも酔った狼人（ベート）の一周回って…もいない告白まがいの発言。酒の勢いのまま吐かれた言葉は、不慣れもあろうがあまりにも下衆のソレだ。空気をブチ壊す無神経なその発言、勢いに呑まれ愛想笑いを浮かべる面々の中には、それさえ浮かべずに嫌悪を滲ませた人物もチラホラと見える。

では件の人物。そんな告白らしきものを吹っ掛けられたアイズ・ヴァレンシュタインその人の反応はと言えば。

「……。」

無言である。だが、無表情ではなかった。いや、彼女と付き合いが薄い者達からすれば、ソレは普段とさほど変わらぬ無表情（クールビューティー）に映るだろう。

だが違う、違うのだ。その表情は明らかに違った。周囲の視線が不機嫌から一転して、驚きと興味の色に染まる。特に言い出しっぺのベートの反応が大きい。その様子は言い淀んでいる？困っている？それとも、悩んでる？

いや、それはそのどれでもあるだろうが。ほんのり頬に朱の差した様子は、どちらかといえば。

――――どこか「恥ずかしがっている」ように、皆の眼には映った。

「ア、アイズたん？なんやねんその反応？」

「ア、アイズさん!?そんな、まさかですよね!?ベートさんはナシですよね!?」

「ア、アイズ！こた、答え！答え聞かせてくれ！」

その反応にそれぞれが困惑や恐怖、そして思わぬ展開にまさかといった期待と言った感情をこめて続きを促し、口には出さない他のファミリア面子(メンバー)も興味深そうに先を待つ態勢に入った。

がらりと変わった空気。こうなると祭り好きの多い冒険者達もまた好奇の視線と共に乗っかってくる。更に遠巻きに有名人(アイズたち)を見ていた酒の回った外野(ギャラリー)も合わさり、店内の空気は瞬く間に、盛大にヒートアップしていった。

熱気にあてられますます恥ずかしそうに口ごもっていたアイズだったが…やがて意を決したように、飲み物を一息に飲み干した（注意。酒ではない）。

タン！と、音を立ててテーブルにたたきつけられた容器の音と共に、訪れた静寂の一瞬。熱気はそのままに静まり返った面々を前にして、アイズはより一層頬をに紅潮させながら、やや据わった眼で…「ソレ」を告げた。

「もう好きな人、いますから。ジャガ丸くんをおいしく作れる素敵な人、いますから。だから…その、どっちも間に合ってます…から！」

それだけ言い放ち、あとは答える気がないとばかりに、アイズは料理を猛然と食らい始めた。

今度こそ訪れる本気の沈黙。理解と不理解の双方に凍り付く刹那。誰もが驚き、或いは呆然として眼を見張るなか、ようやく言葉の意味が、血と共に全員の脳へ巡った瞬間。

時は、動き出した。

『な、なな、なにイィィいいいいいいいいいいいいいいいいいいいい!?』

その日。ちょっぴりお高い憩いの酒場「豊穣の女主人」は、内側から響いた、迷宮都市の端までも届きそうな絶叫の複合合唱に、本気で壊れそうなほど激しく震えたという。

あと約三名ほど（神一柱含む）、その場で失神したそうな。完全な蛇足である。

…尚、その前に誰にも気づかれずに逃げ出していた白兎君（ベル・クラネル）がその発言を聞けなかったのは果たして幸か、はたまた不幸なのか。

それは誰にも分らなかった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

俺がジャガ丸くん移動販売店「小泰山」を経営するようになった理由（きっかけ）は、恐らくかなり情けない理由に部類されるだろう。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「大変に言いづらいことだが、君には武才がないな。」

そんな身も蓋もない評価を我らがファミリアの団長から喰らったのは、部位鍛錬を散々にさせられ、苦しみ抜いていざ鍛錬を…といった矢先でのことだった。

光の死んだ眼差しと共に、どこか愉し気に叩きつけられた言葉は、まだ幼かった俺を硬直させるに十分な威力を秘めていた。だがこの巨躯の団長様はこちらの硬直に気遣うこともなく（というかそんなデリカシーを持ち合わせていたとしても使う気は恐らくなく）、容赦なく酷評を続けた。

「基礎も基礎とはいえ、厳しい部位鍛錬にはよくぞ耐え抜いた。内気功の才もまずまずといった所だ。善い眼と頭もある、そこは素直に褒めておくとしよう。忍耐面に関しては及第点だ。

…が、肝心の戦う才覚に大きく欠けている。うん、度胸？いいや、そういったものではない。要は闘争心に欠けているということだ。」

少なくとも単身ダンジョンに潜れるものではない。色々言われたが、総評するとこういった結論だった。

正直泣きそうだった。というか泣いたかもしれない。当たり前だ、この時の俺は八歳かそこらといった年頃である。冒険者になりたくて小人族（パルウム）という肉体的には決して恵まれてるとは言えない身体に鞭打って鍛えた全てが「無駄だった」で片づけられれば泣きたくもなる。

故に食い下がった。荷物にはなりたくないと、どうにかして迷宮に潜りたいと。諦めたくはない、まだ何も成し得てはいない…しかし幾らそう叫んだ所で、団長は微笑みながら首を振るばかりだった。

「団長として承服しかねるな。ハッキリ言って、君では潜ったところで死ぬだけだろう。第一成し遂げたいというならば君にはあまりにも多くが足りていない。武才、行動力、共に潜る仲間達。

知っての通り私は既に怪我と衰えを理由に前線を退いた身だ、残念ながら付き添え

ん。君の双子の姉もハッキリ言って武才には乏しい。生き残る才は十分だが、地下に潜る、先に進むということを前提とすれば…これでは君とセットでも無駄も無駄だ。因みに姉の方には後で伝えるつもりだ。」

膝を折りそうだった。折らなかった自分を今なら褒められる、念入りに站？やっててよかった。あと親愛なる我が姉君にも同じ挫折と絶望を追って味わわせると面と向かって言いやがった。泣きそうだ、膝だけ笑ってる。

今の俺では迷宮に潜れない――それはつまり、俺は今後冒険者として迷宮に潜れないという、純然たる事実を表していた。なにせ俺の所属する「アンリマユ・ファミリア」には団員が四人しかいないのだ。元・Ｌｅｖｅｌ６の冒険者である団長に、事あるごとに歪んだ教育を施そうとして団長にしばかれる東方出身の出張カウンセラー、そして気が付いたらこのファミリアに拾われていたという俺と、双子の姉だ。

つまるところ、経済的な余裕がないのだ。ついでに言えば働かない我らが主神・アンリマユは神々からの評判もすこぶる悪く、人脈がないし人望もない。収入面は団長が勤めている小さな料理店からの収入だけである（因みにカウンセラーは無償だ。曰く、完全なる趣味での「人助け」だという）。俺達が何とかしなくては、そう思って姉と誓いを立てたのはそう古い記憶ではない。

これからの自分達の成長も考えれば、今はもう働きだす手前だ。つまりピークである。

「君の気持ちはよくわかるとも。お荷物になりたくないという気概は大変に見事だ、教育してきた身としては実に喜ばしい。そして小人族の子供、それも我らが「アンリマユ・ファミリア」所属の子供を好き好んで雇うような奇特な店はそうそう見つからんだろう。だからこその冒険者という選択だった、だからこそ私も敬意を表し、君たちを鍛えてきた。

だが…残念ながら、私としてもむざむざ若い芽を摘ませたくはないのでね。」

その言葉に、俺はなにも言えなかった。純粋に感じ入っていたのもあるが、本格的に道が閉ざされてしまったからだ。

諦めるつもりはない。俺の、俺達の居場所はここだ。ここだけだ。守りたいと思う。だから考えなくてはいけない…そう思い悩み、俯いていると。肩に大きな手が置かれたのだ。

「だが喜べ少年。君の願いは問題なく叶う。」

その言葉に思わず顔を上げた。優しく微笑む団長の顔に、思わず光を見た気がした。
団長はゆっくりと頷き、こちらを見据える。口元が弧を描いたまま、白い歯を覗かせて開く。

「もう長いこと私が勤めている料理屋「泰山」の店主がもう歳でな。さしあたって、近い将来に店を引き継ぐこととなった。そこで私としては後任の教育と顔を広めるために、店とは別に移動式の屋台を設けたいと思っている。販売メニューは味の宣伝も含めてこれから考えるつもりだが…よければ君たちにはそちらを請け負ってもらいたい。」

…なんという手回しだ。抜かりないその手腕、その示された光明を前にして俺は素直にそう思い、感謝と尊敬の眼差しで見つめ、力強く頷いた。
正直先程まで団長を外道と思いかけた自分を殴ってやりたい気持ちでいっぱいになる俺の即決に、団長も嬉しそうに笑いながら、力強く頷いた。

「では午後から姉にも事情を伝えた後に、料理の鍛錬に入るとしよう。何、今まで散々持ち帰った店の賄やら売れ残りで既に味の仕込みも済んでいる。あれだけの部位鍛錬を

こなした今のお前達ならば私のしごきにもついてこれるだろう。
否、――――ついてきて貰わねば困る。思う存分に苦しみ…自らを磨き上げたまえ。」

そう告げた後に、踵を返した団長の後ろ姿は。普段となんら変わらないのに…いつも以上に大きく、立派で、輝いて見えた。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

…これが俺の、俺達の始まり。俺達の理由。俺達の店「小泰山」のスタートラインだった。挫折から始まった。何も持たず、才能に敗けて、境遇にもがいて、やっぱり助けられて始まった道だった。

他人から見れば情けない道かもしれない。…それでも諦めたくないと歩き、やっと繋がった道である。だからこの道を歩んだことに後悔はなく、この道を歩めたことに感謝し続けている。

だからこそ巡り合えた「運命」もあったのだ…だからこの道を、俺達はきっと歩き続

けるんだろう。そんな思いを胸に抱き、今日も俺達はジャガ丸くんを揚げ続け、人々から笑顔を貰うのだ。

戦えない俺達に代わり、戦ってくれる誰かのために。

今日も感謝と、最高の「笑顔（おいしい）」を届けよう――――。

…ン……？アレ…？

なんか変だぞ…？いや、というか…。

…これもしかして、俺達は最初からこのために鍛錬積まされてたのでは…？

咲き誇る華の如く（口内に広がる麻婆の比喩）

「…私の好きな人について、詳しく教えろ？」

「せやせや！納得いく説明聞かせぇやアイズたん！」

太陽が落ちるかの如き爆弾発言で幕を閉じた、宴会翌日の朝の事だ。集団を前にしての一大告白の羞恥を隠すために行ったヤケ食いの影響で胃もたれ気味のアイズが、一杯ばかりのスープで朝食を済ませた直後、三人の人影が詰め寄ってきた。

無論、昨夜直後に失神した三人組である（内一名は一柱だが）。特に特攻したら一撃必殺（にのうちいらず）の迎撃（カウンター）を喰らった狼人ことベートは、今にも噛みつきそうな様子で殺気さえ滲ませている。勿論、殺気の矛先がアイズではないのは言うまでもないだろう。

そんな三人組の要求に、アイズはジト眼で睨みつけながら返す。

「…イヤです。絶対迷惑かけるじゃないですか、彼に。」

「そ、そんな…！あ、実は嘘だったんじゃ!?ベートさんの告白が嫌すぎて、回避するための嘘だったんじゃないですか!?」

「なんつーコトを口走ってやがる雑魚エルフがァ!?」

にべもなく断られたことに狼狽するも、舞い降りた天啓に、思わず希望を見出して声を弾ませるレフィーヤ。汚物が如き扱いに当然ながら食ってかかるベートだったが、冷静に考えてみれば、そっちの方がまだ希望があるのでは?という考えも過り、人知れず壮絶な葛藤が始まりそうになる。

だがそうは問屋が卸さない。レフィーヤの発言に、不機嫌さを増してアイズが首を振る。

「嘘なんかじゃないです。私は…その、彼が好きです。何度でも言えます。」

「ぐぼぁあッ!?」

「昨日のベートさんがゴメンなのは事実ですが。」

「ぎゃぶぅッ!?」

「ベートさんが死んだ!?」

「え、エゲつないでアイズたん…！」

一切の慈悲もなくバッサリと希望を切り捨てられた上に、トドメの追撃に血反吐を吐いたベートが床に沈んだ。その容赦のなさにショック以上に震える一人と一柱だったが、見ればロキもまた膝が笑っている。彼女は「人間の嘘がわかる」という神の性質が、まさかこれほど呪わしく思える日がこようとは思ってもいなかった。

しかしアイズはまだ止まらない。見れば全身でややもじもじとしながら、頬には薄く朱が差している。普段であれば愛らしさのあまり三者三様悶絶必須の仕草なのだが、一人と一柱、ついでに床に伏した一人には、今はそれがとてつもなく恐ろしい怪物の捕食シーンにさえ思えた。

そして、絶望の追撃（エクストラアタック）はやってきた。

「何度だって言えるには、言えるけど…恥ずかしいものは恥ずかしい。それに、その…多分惚気（ノロケ）て、しまうから。抑えが利かなくなりそうで…だからあまり、言いたくないです。ごめんなさい。」

しかも致命の一撃（クリティカル）である。

今度こそ、三つの屍が食堂の床に転がった。完全に沈黙した三人組は魂が抜けたように白くなり、自力で回復する見込みは薄そうなほどに燃え尽きているのが素人目にも見て取れた。周囲で事の成り行きを黙ってみていたファミリアの面々があまりの惨状に思わず同情するのも無理からぬことであり、気付けば皆、無意識のうちに合掌していた（仏教徒ではないハズだが）。

一方、ようやく沈黙した三人にホッと一息つき、安堵のままに立ち去ろうとするアイズだったが…今度こそ、アイズは困惑することになった。

「フィン？」

「まあ恥ずかしいという気持ちは察するし、個人的（プライベート）な問題に口を挟むのは野暮もいいとこだけどね。そこを曲げて、少し話を聞かせてほしい。その彼と、君の関係性にね。」

出口への行く手を遮るのはフィン・ディムナ。彼と同じ種族である小人族（パルゥム）きっての「勇者（ブレイバー）」であり、一時聞いた話では彼のかつて尊敬する相手でもあったという、「ロキ・ファミリア」の団長である。そしてよく見れば、両隣にはガレスとリヴェリアの姿も

あった。場の空気が浮ついたものから一気に緊迫したものへと塗り替わっていく。
何故フィンが？場違いにも思える登場に困惑するアイズを余所に、フィンは言葉を続けた。

「アイズ、君は「ロキ・ファミリア」の幹部だ。それは決して軽い立場とは言えない…つまり、団長としては無視できない事柄だ。向こうの人柄やファミリアもわからないというのは流石に容認しかねる。
それに君の立場で自由に恋愛をするなとまでは言うつもりもないが、これは君の為にも聞いておかなくてはいけない。」

「私の為…？」

「そうだとも。お前がその彼が好きだというならば、きっと我々から見ても信用できる人物だろう。故に邪魔をするつもりは毛頭ない。だが…。」

「ホレ、関係が進めば色々ありえるじゃろ。結婚とか。」

「けっ…!?」

ようやく言葉と話の流れに理解が及び、アイズの顔が朱が差したなどというレベルではなく、薔薇のような鮮やかな赤味に染まっていく。突如として湧き上がる想像に頬が知らず緩み、胸を満たす温かな多幸感は想像を絶するものがあった。

その様子を驚きながらも、微笑ましく見守る保護者達。ひとしきりもじもじとしていたアイズは、ようやく落ち着きを取り戻し、向き直った。

「わかりました。でも、長いですよ。」

「望むところだとも。」

「それに、面白い話でもきっとないです。」

「それはワシらが決めることだ。」

「じゃあ…。」

「皆、申し訳ないが着席してくれ。興味がない者は幹部を除き、退室を許可しよう。…ああ、あとそろそろそこの三人を起こす必要があるな。ティオネ、頼めるかい?」

「お任せください団長!ホラ起きろやオラァ!」

「結局また死にそうだねー、特にベートが。」

漸く、長い長いざわめきが纏まり、皆が笑いながら着席していく。

死に瀕した三人も無事（とは言い難いが）生還し、並んで着席していった。その様子を見届け…やはり少し恥ずかしいなと思いながらも、この気持ちを恥じる理由はないと、彼女は大きく深呼吸をして――

「じゃあ、聞いてください。」

その邂逅を、その想いを口にした。

星が落ちるような、燃え盛る恋の話を。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「えっと…コホン。――食うか？」

そういって差し出された、真っ赤なジャガ丸くんが全ての始まりだった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

数年、もういっそ十年にも届きそうなほど昔の話だ。今よりもずっと「強さ」というものに固執していた私は、絶えず自分の身体を苛め抜く日々を送っていた。

何度も心配をかけた。何度も怒られた。それでも、私は止まることが出来なかった。

そんな発想も頭になかった。

…だって。

だって私の隣には、「英雄」が現れてはくれなかったから。父のような、「英雄」が。

だから焦っていた。ずっと考え続けていた。どうすればもっと早く、より大きな「強さ」を得られるのかを。どうすれば…「英雄」になれるのかを。

そうやって考えて、むしゃくしゃしながら毎日を生きていて――――「剣姫」と呼ばれるようになっても一向に「英雄」に近づけている気がせず、強くなった実感がわかず。何が足りないのか、必要なのかを自問自答し続けるようになった。

そんな時だ。オーバーワークも苛烈を極め、疲れて宛てもなく都市を歩いていると…鼻腔を擽る、食欲を非常に刺激される匂いが漂ってきた。

「…あ……。」

途端に主張し始めた激しい空腹感に促されるまま、私は視線を巡らし、匂いを辿った。路地を進み、人込みを離れ…少し歩くいていくと、入り組んだ路地の隅に小さな屋台があった。

刺激的な香りは間違いなくそこから漂ってきている。見れば店主らしき人物が大粒

の汗を垂らしながらも、少し離れた位置からでも聞こえるほどいい音を立てて、何かを揚げていた。

暴力的だった。

空腹感はピークもピーク、そこにきてこの匂い、この音。ふんだんに用いられた香辛料の香りと香ばしい衣の織り成す芳しさときたら、一瞬「強さ」とか「英雄」とか完全に吹き飛ばすだけの威力があった。しかも私は、これ見よがしに屋台の屋根から垂れさがる「垂れ幕」にある文字を見逃さなかった。

――――「ジャガ丸くん、揚げたてです」。

もう駄目だった。好物の文字までぶら下げられてしまったら、もう買わずにはいられない。フラフラとした足取りで屋台へと歩み寄っていく私は、店主の「いらっしゃい」という言葉に対して返事もそこそこに、財布を取り出そうとする。

そう、したの、だが。

「あ、れ…？」

財布は、なかった。あまりの衝撃に、頭の中が全て漂白されていった。

財布がない。落とした？忘れた？どっちでもいい、結果が変わらないなら…今、ジャ

ガ丸くんを買えないのなら、どちらでも同じだ。
深い絶望に、泣きそうなほど心が折れたのがわかった。
「…あの…なんでも、な――――」
「ハイ、お待ちどうさま。」
震える声で、なんでもない、そう告げようとしたところで、大きな包み紙が差し出された。
思わず反射的に受け取った私の顔に、ふわりと当たるおいしそうな湯気。視線を落とせば、袋一杯に収められたジャガ丸くんがあった。待ち望んだ歓喜の声を上げるように、空腹を告げる虫の声が大きな音を立てる。
思わず目を見開く私の前には、小さな店主が微笑みを浮かべて立っていた。
「お熱いうちにどうぞ。」
「…でも、私…。」
「今日はいいよ、感謝の気持ちってことで。」
感謝。はて、この彼に何かしただろうか？思い当たる節は見当たらないが、いい加減

限界だった私は言われるがままにまずは一つ、プレーンなジャガ丸くんを頬張る。
おいしい。それは、今まで口にしたジャガ丸くんの中でも一番と断言できるほど、丁寧な仕事を施された味わいだった。止まらず、私は次々にジャガ丸くんを口に頬張っていく。
見る間に袋を空にしていく私を眺めながら、やはり店主は嬉しそうに笑っていた。ホッと一息つくと、後から滲むように羞恥心がこみ上げてきて、私は顔が熱くなるのを感じた。

「あの…。」

「うん?」

「まず、ありがとうございます。ジャガ丸くん…すごくおいしかったです。」

「そっか…うん、うん。こちらこそありがとう。」

「それで、なんですが。」

「うん？」

「なにが感謝なんでしょうか。ごめんなさい、私は…あなたを覚えていません…。」

先程の言葉が気にかかり、思い出そうと必死に記憶を呼び起こそうとするも、目の前の店主に該当する記憶は存在しなかった。そもそも私の記憶の中に小人族の存在など団長であるフィンくらいしか存在していない。故に、ここまでご馳走になった相手への罪悪感に締め付けられながらも、そのことを素直に告白した。

だがそんな私の言葉に、店主は「あー…」という短い声と共に、苦笑いを浮かべると

「いや、混乱させてゴメン。初対面だよ。」

「…え？」

罪悪感など余所に、出てきた言葉はそんな、思いもよらないものだった。

思わず呆けた私。しかし、次ぐ言葉には呆けてなどいられなかった。

「見た所、君は相当に腕のたつ冒険者に思える。だから「感謝」したんだよ。戦えない俺達に代わって、いつも前に出て剣を振るってくれる君に、君たちに。」

「――――ッ!!」

何気ない感謝の言葉に、満たされた幸せな気分が一転、ズクンと大きく胸を抉られたような痛みを覚えた。ある意味で、それは私が一番に恐れていたことばだったからだ。

違う、そうじゃない。私が感謝なんかされる謂れはない。感謝なんかしないでほしい。満足してはいけないから、そんな温かい言葉で私を絆さないでほしい。

だって、私は――――、

「弱い。」

「……え？」

「私は、腕も未熟。強さも足りない「弱い人間」のまま。何が足りないのか、その答えだってわかっていない。あなたに感謝される謂れはない。そんな資格、ない。」

最低だと思った。おいしいものを無償で貰い、感謝されて吐き出していい言葉ではないとおもった。

だが言わなくては行けなかった。譲るわけにはいかなかった。これは決意だと自分に言い聞かせる。たとえ目の前の店主を怒らせても、悲しませても、これだけは言わなくてはいけないと思った。私は自らの意思で、呪いのような言葉を吐き出していた。

だから全てを吐きだし、俯く。とても目を合わせられない。店主の沈黙が、酷く恐ろしいものに思えた。どんな罵声も同情も覚悟して、情けなく受け止めるつもりだった。

「いいや、感謝するよ。」

「――――……。」

覚悟は決めていた。だからこそ…今度こそ、何も言えなかった。
覚悟していたものとは別の、店主の言葉は続く。

「俺は、迷宮（ダンジョン）に潜ることも出来なかった（ゆるされなかった）人間だ。血反吐吐くほど努力をした、でも結局、それは叶わなかった。全てが無駄に消えたわけじゃないが、出だしから敗北した。」

「後悔はないさ。さっきも言ったが無駄に終わったわけじゃないし、この仕事も気に入りだしてる。その意義を俺は、俺達はもう見つけてるから、この道に立てていることへの感謝はあっても、後悔はない。」

「――――でも未練がないわけじゃない。」

聞き入っていた。こちらを見つめる店主の…少年の瞳が、あまりにも美しく映っていた。

神ならぬ身であっても、容易く理解できた。真実だと。そう訴えかけるだけの誠実さが、そこにはあった。

「もっと努力出来ていたら違ったのだろうか。もっと才能があれば叶った夢なのだろうか。もっと工夫を凝らしていれば…もっと足掻きに足掻いていれば、俺も誰かの前に立てたのか。誰かの隣に立てたのか。そう思うときは、今でも多い。わかっていてもね。」

「だから君に感謝するし、尊敬する。いくらでも応援するし、こんな程度の困難ならいくらでも手助けするよ。君は前に進めた人だ。誰かのために、剣を振るう人だ。きっと恐怖も苦痛もあったのに、君はそれを成している。」

「俺は君と違って弱い。どこまでいっても守られてるだけの、人間だ。だから俺は…君の「強さ」に、心からの敬意と感謝を捧げるよ。いつでも帰りを信じて、この屋台で待ちながら。だからお腹が空いたならばいつでも来なよ。…流石にいつでも、いつまでも

タダとはいかないけど、たっぷりサービスするからさ。」

そこまで言った所で、先程まで小さかった少年が、とても大きく、眩しいものに変わっていった。何も言えない私を余所に、店主は一度、手元に視線を落とすと…一つの、個包装用と思しき包みを、目の前に差し出してきた。

ジャガ丸くんだった。それも赤く、強い香辛料の香りを放つ、今までのものとは違うタイプのものだ。

「さしあたっての追加サービス。団長も俺達も大好きな至高の一品をどうぞ。

えっと…コホン。――――食うか？」

その言葉に促されるまま、私は包みを受け取り、赤くて刺激的な様相のジャガ丸くんにかぶりついた。

ざくりとした心地よい衣の触感、渾然一体となった香りの調和と爆発。ホクリとした芋の触感の先から、トロリと流れ込むソースが舌を突き刺し辛――――。

ン？辛？

辛…辛…、辛……、辛……。

――辛ッ!!!?

「～～～～～～～～～～～～～～～～～ッッ!?」

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおッ!?」

仰け反り、倒れ、のたうち回る。放り投げたジャガ丸くんを見事キャッチした店主が驚きながら駆け寄ってきたが、それどころではなかった。

熱い。辛い。というか痛い。鼻を突き抜ける香りに涙が止まらない。頭の中が煮えたぎるように沸騰するのが実感できる。胃の腑に落ちた熱が溶けた鉛のように熱く重たい。毒？いいや、そんな生易しいモノではない。

これは地獄だ。地獄の具現だ。

「このアホンダラ――――!!」

「ぐほぉあっ!?あ、姉君様…!?」

「ちょっと留守にしてたら、食わせたの!ソレ!一般人にはまだ早いと言ったでしょうが…!」

「いや美味しいし元気でそうかなって…。」

「いいから牛乳割ポーション持ってこい!飲ませろ、痙攣してるぞ!」

「い、イエッサー!」

なんだか新たな乱入者も増えて大変賑やかになっているが、全てがどうでもよかっ

た。
短い、余りにも短い今までの人生が駆け巡る。ああ、皆の顔が過ぎ去っていく。ごめんなさい、私はここまでかもしれません。色々心配かけましたけど、どうか店主さんを許して、あげ――――

『アイズ。』

忘れもしない声が聞こえた。意識がはっきりとして、生への執着が蘇ってくるのがわかった。
もう聞けないと諦めかけた声だ。急いで眼を開けば、そこには心配そうに私を覗き込んで、白いドリンクを飲ませてくれる少年の顔があった。
和む口の中の痛みに周囲を見渡すが、声の主の、ずっと会いたかった人の姿はない。だが…声は、消えてなかった。

『いつかお前だけの英雄に、巡り合えるといいな。』

――――あ――――。

声はそれだけ言うと、残響も残さず消えていった。茹だった脳が急速に冷えていき、今まで噛み合わなかった何かがカチリと音を立てて嵌った気がした。

ただの、幻聴だったのかもしれない。だがもしかすると、何かの奇跡だったのかもしれない。その解釈は自由だ、だが私は…きっと、後者である気がした。そのほうが、きっと素敵だから。

霞む視界がはっきりして、少年の顔がハッキリしてくると、私は弱々しく手を伸ばしていた。

そして、尋ねていた。

「私は…「英雄」に、なれますか…？」

その質問に安堵の表情から驚いた少年は、やがて伸ばしたその手を握り…穏やかな笑みと共に、答えた。

そう。それは私の得た答えを肯定するもの。知らぬ間に摩耗した「願い」を、照らし出した光。

「もうなってるよ、君は。」

温かい。胸の内から湧き上がる気持ちが、身体の隅々まで行き渡っていく。

そう、私は「守りたかった（つよくなりたかった）」。皆を、居場所を、そして彼を。目に映る全てを、愛しい全てを守りたかったんだ。

ずっと見落としていた。知らない間に置き去りにしかけていた。それを、今、取り戻した。

「君はとっくに、誰かを守れる「英雄」だ。」

涙と一緒に、笑みが零れた。感じた事のない気持ちが…いや、どこか懐かしい気持ちが、身体の奥底から湧き上がってくる。でもまずは…彼のように、この溢れ出る「感謝」を捧げよう。

「ありがとう、ございます。私は…アイズです。「ロキ・ファミリア」の、アイズ・ヴァレンシュタインです。本当に、本当に…ありがとうございました。」

「…どういたしまして。俺は白野。キシナミ・白野…「アンリマユ・ファミリア」だ。これからもどうか御贔屓に、アイズ。」

ありがとう、白野。

あなたのおかげで私は英雄になれました。なっていたのかもしれないけど、きっと正しくなれました。

背中にいる人たちを思い出せました。剣を振るう理由を、足を動かす想いを思い出せました。

だからもっと強くなります。なって見せます。きっとなれます。後ろにいる白野(あなた)を、皆(かぞく)を守り抜きます。

だから、どうかあなたを守らせてください。あなたと共にいさせてください。
私の帰りを…どうかずっと、待っていてください。

私の愛しい、白野。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「…という、コトがあった。あれから数年経っても、気持ちは変わっていません。私はずっと…彼が好きなままです。」

今も褪せない、二人の出逢いの物語。ようやく謳い終えたとばかりに額に浮かんだ汗

を拭い、アイズは万感の思いを込めて締めくくった。
無論、感想は人それぞれだ。だがこの想い、この恋に間違いはなかった。それだけは否定をさせないと、アイズは強く思う。きっとこれからも変わらない、あの時よりも強くなれた私こそがその証明なのだから。
そして見渡した食堂の様子に――――彼女は眼を丸くした。
率直に言って暗かった。静まり返っていた。あと色々力尽きていた。

「…いや長いとは言ってたが、まさか日が沈むまで話を聞くことになるとはね。」

「ちと見くびっとったかのう…。」

「…Ｚｚｚ……ながい…むにゃ…。」

「ティオナめ、寝ちゃってるじゃないの…あ、私はよかったと思うわよ?アイズ。ちょっとシンパシー感じたわ。」

「おい、ベートが途中からまた死んでたぞ？」

「いや、しゃーないでしょうコレ…誰だって死にたくなると思うっスよ…？」

「というか麻婆で殺されかけてましたよアイズさん!?眼を覚ましてください、ソレ絶対刷り込みとかの類ですって！」

「アンリ…アンリマユやとぉ…？あの、あの人ォ舐め腐った、チャラけた最弱ニート神の所ン餓鬼に、ウチのアイズたんが誑かされた言うんか…!?上等じゃボケェ、戦争やぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!!」

…あれ。可笑しい。悪化してる気がする。

…まあ、いっか。言いたいことは言えたし。

明日、白野に会いに行こう。沢山甘えて、ジャガ丸くんを一緒に食べよう。

はやく明日に、なったらいいな。

「…そういえばアイズ、途中から乱入したのは結局誰なんだい？」

「あれは白野の双子のお姉さん。とっても優しくて、面白いけどしっかりしてる人。」

「小人族？」

「小人族。」

「…よし、一度視察も込めて挨拶に行っておこう。ああ、僕一人でいいからね。」

『団長（フィン）!?』

あげていくぞ（糖度的な意味合い＋α）

「はい、どうぞ。」

「あーん。…ンむ、はむ。…おいしい。」

「ご機嫌だね、アイズ。」

「うん。…幸せだから。」

長すぎる告白演説会から日を跨ぎ、翌日。アイズは誰かに止められることを恐れ、朝早くに「黄昏の館」を飛び出して、昨日立てた胸中の誓いを、確かな現実のものとすべく行動を起こしていた。

何、酒場の一件から昨日で、もう多方面でバレている。自分の気持ちも、白野との関係も…ならば躊躇う理由がどこにあろうか？いいやない。ならばもう自重せずに、周囲へと知らしめる必要があった。

彼は私のもので、私は彼の英雄（もの）だと。今ならティオネの気持ちがよく理解できる、アイズの素直な気持ちだった。

「そっか。…よかった。」

「当然。…白野もそうだよね？」

「勿論。というか、この状況で否やはない。」

「…えへへ。」

結果、現在…アイズは甘えていた。それはもうグズグズに、見た目的には三つか四つは下であろう白野に対して、全身で甘え尽くしていた。人目も気にせず日の高いうちから、ベンチで恥ずかしげもなく膝枕だった。当然ながら遠巻きに見ている外野（ギャラリー）の心中で、『アイズ・ヴァレンシュタイン＝ショタコン』の方程式が構築されていく（当人は間違いなく否定するだろうが）。

ともあれ、とても気持ちよさそうにしながらも、ちょくちょく寝返りを打って膝に腿

にと顔をうずめたりする様子は正しく甘える小猫のソレ。事実、自分の匂いをこすりつけるような動きをちょくちょく見せつけている。実際にはそれだけではなく、白野の匂いも堪能するという徹底ぶりなのだが…訓練された人間でもなくばソレは見抜けないだろう。

オヤツは勿論、白野の手製ジャガ丸くんである（麻婆抜き）。

「もう一口食べたい。」

「はい、あーん。」

「あむ。…ん、おいしい。白野もあーん。」

「…あ、あーん…うん、おいしい。」

唐突に甘えぶりが激化したことに対して、事情を知らない白野の方は当初こそドギマギもしたが…今やすっかり順応しつつあり、膝に寝そべるアイズにジャガ丸くんを食べさせ、時折食べさせ返されている。

そうそうお目にかかれぬバカップルもかくやというイチャつきぶりに、遠巻きに見つめていた外野（ギャラリー）が盛大な舌打ち連鎖を起こしているが、少なくともアイズは気にした様子もなく、寧ろ一層身体を摺り寄せている有様だ。白野の方は若干どころではない気恥ずかしさに、少々いたたまれなくもあったのだが…。

「おいしい？」

「うん。…結構、恥ずかしいけど。」

「大丈夫、私は気にしない。…今日はずっと甘える、から。」

「…悪い気はしないかな。いや、違うな――俺も嬉しいよ。」

「…フフッ。」

…この笑顔を曇らせないためならばこの程度、些事にもならないと断言できた。ささやかな躊躇いも恥じらいと共にそっと蓋をし、奥底へとしまい込む。望むがままに存分

に甘やかすとしよう、そう決めるのに時間はかからなかった。
そう、待つしかできない身では最早ない。この身はもう、既に一人の少女が帰り着く場所なのだ。その帰還を信じて、とにかく信じて、変わらぬ姿と気持ちでアイズの帰還を待ち続ける。共に戦場に立つことこそ出来はしないが、それは同等以上に難しく、双方にとっても重要なことだと白野は思っていた。
ジャガ丸くんに触れていない方の手で、優しくアイズの柔らかな髪を撫で梳いていく。抵抗はあらゆる意味で皆無であり、ふにゃりと崩れたアイズの心地よさそうな表情がとても眩しく感じられた。
柔らかい日差しの中、邪魔もなく、二人の時間はまだまだ続く。
きっとまた明日も会えるとは言え、のんびりとした時間が過ごせる日が貴重なのはいつの時代も変わらない。
だからこそ、この時間こそが何よりも尊いのだと、二人は気持ちを一つに思っていた。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

まあ邪魔が入っていないというだけで、別に邪魔者がいないという訳でもないのだが。

二人から見て丁度死角となる物陰に、彼らは存在していた。正直普段であれば即座に気付かれそうなほどに気配を…というよりも邪気と野次馬根性を剥き出しで、食い入るように二人だけの世界を見つめていた。

「う、うぅぅぅぅぅ……アイズさんが、あんな、あんなにぃ～…っ。」

「はえー…嘘みたい。アイズってあんな風に甘えるんだ…。わ、ちょっとドキッとしちゃった。」

「ちょっと、あんまり声出さないでよ。気付かれたらどうすんの？」

「いやー、気付かないんじゃないっスか？周りも舌打ちしまくってますけど、全く気にしてないですし…。」

「あっちの…白野…だっけ？途中まで気にしてたみたいだけど、止めたって感じだよね。ねえねえベート、どう思う？」

「――――――。」

「駄目ね。もう憤死してるわ、この駄犬。」

「ベートさんが死んだ!?」

「なんで来ちゃったんスかこの人？」

ワイワイがやがやと賑やかな尾行者たち。それぞれの反応は十人十色だが、共通しているのは見知った間柄であるはずのアイズの見せる、見たこともない甘々な反応に興味津々という点だ（また死んでる狼人のベート某は除外する）。

アイズが抜け出した後、姿が見えないことに気付いた面々はなんとなく展開が読め、

いてもたってもいられないとばかりに「黄昏の館」を抜け出し、その足取りを追跡していた。無論気の張った上に、最速のアイズの尾行など容易な筈がないのだが…そこは邪な考えに満ち満ちた二人組が異例の協力体制を敷くことで何とかしたのだ。尚意外にも、一番参加しそうな彼らの主神は今回不参加である。昨日の演説会で怒りが頂点に到達した彼女は盛大にヤケ酒をし、今も再起不能のままくたばっていた。

「いいわ、その辺に捨てておきましょう。」

「だねー。というかさ、コレもう一日あのままじゃないの？ずっと見てるの？」

「あっちの方も普段は屋台引いてるらしいっスからね。調べたら「小泰山（ザビーズ）」って今結構人気店みたいっスし、あそこまでのんびり出来る日ってそうそうないんじゃないですか？」

「な、なに言ってるですか皆さん！あの麻婆男の化けの皮を剥ぎ取りましょう！アイズさんの眼を覚ませ――――ああ！また、またあんなにくっついて……！」

「いやもうくっつきっぱなしじゃないっスか。俺もう苦いコーヒーでも飲みたいっス……ン？」

とはいえ最初こそ興味津々だったものの、ずっと甘えている光景を見ているのは飽き以上に精神にクルものがある。好奇心旺盛なティオナでさえ若干辟易としつつある以上、まだ半日以上もこのままとは思いたくないが、場面を変えた所で同じ展開が繰り広げられたのでは溜まったものではない。

そんな最中、興味本位で来るんじゃなかったかなと思い始めたラウルが、手ごろな喫茶店でも近くにないかと視線を巡らせた際に――――幸か不幸か、「ソレ」を発見した。

「どしたのラウル？」

「いや…アレ、あそこ歩いてるのって…団長じゃないっスか？」

「団長ですって!?」

言葉を不自然に途切れさせたことに訝しんだ、ティオナの問いかけへのラウルの返

答。それに真っ先に喰いついたのは「ロキ・ファミリア」が（遺憾ながらも）誇る初代ショタコン女（ティオネ・ヒリュテ）である。

彼女は今回、先に意中の相手、それも小人族（パルゥム）を射止めたというアイズの手腕を念入りに研究するために、尾行という今回のミッションに二人組に次いで乗り気だった訳だが…それも意中の相手である男の名前を耳にしたことで、そんな興味と勤勉姿勢は塵も残さず吹き飛んだ。振り切られる愛欲のメーター、姿勢は一転捕食態勢に切り替わり、乙女のソレではなく、もっと獰猛でネットリとした輝きが瞳の奥で爛々と燃え盛る。

団長がいるならば話は別だ、研究なぞもう知ったこっちゃねえとばかりに、発見者であるラウルを押しのけるように身を乗り出し、鼻息荒くティオネは指先の方向へと視線を向けた。

「……、……。」

そこには周囲から、尾行対象たちに向けられたものとは別口の、もっと熱っぽい視線を多方面から受けながら歩く一人の小人族がいた。片手には小さな地図のような物を手にしており、ソレを見ては歩きながら周囲を見渡している。

金の髪、滲む知性、幼くも精悍な顔立ち。間違えるハズもなく、その人物こそはティ

オネの意中の相手である「ロキ・ファミリア」団長、フィン・ディムナその人であった。条件反射で思わず駆け寄ろうとするティオネに、左右から待ったをかけるように伸ばされた手がソレを遮る。冷や水を浴びせるが如き妨害行為。熱を帯びた女の顔は、それだけで憤怒に燃える獣のものへと姿を変えた。

「……オイ。どういう了見で私の邪魔してる?」

「い、いやぁ。こっちとしてもあんまり邪魔したくはないんスけどー…。」

「いやホラ、落ち着いて見てみなよティオネ。今日の団長ちょっといつもと違わない?」

「あぁ? 違うって…。」

ラウルに、そして妹であるティオナからの思わぬ指摘に、牙を見せた殺意も引っ込め怪訝そうな声を上げるティオネ。しかも団長がらみとなれば無視できず、改めて団長…フィンの姿へと、その視線を走らせる。

その姿に見惚れ、上から下までじっくりネットリ、舐めるように観察し。そして唐突

に、指摘された、その違和感の正体に気付いた。

「…いつもよりカッコイイわね。」

「というか、心なしかカッチリしてるというか…普段の私服じゃなさそうっスよね。」

「アレ、右手にあるのって「プレミアロールケーキ」の包みじゃない？人気店の。私も食べたいなー…。」

「センスが尋常じゃない…流石団長、素敵…――――じゃなくて、あの感じ、誰かに会いに行くつもり…？」

「なんか探してる感じっスね…。」

情報を整理し思考を巡らす三人の視線の先で、辺りを見渡していたフィンは静かな足取りで小さな路地の方へと進んでいき、その姿をくらませた。

これに焦りを覚えたのはやはりティオネだった。可笑しい。危険な胸騒ぎがする。

「アレ」を放置していては、なにかとんでもなくマズイ事態になりかねない。理屈以上に戦士として女として、そしてアマゾネスとしての本能が、かつてない最大レベルで警鐘を鳴らしている。

絶対に無視できない。

判断は一瞬だった。呆けたように突っ立っているティオナとラウルの襟首を掴み、戦闘でもそうそうお目にかかれない本気モードの覇気を漂わせながらティオネは吠えた。

「追うぞテメェらァ！」

「え、えぇ!?アイズは!?白野は!?というかレフィーヤとか放って置いていいの!?」

「知るかンなモン！団長が、団長が危ないんじゃァァァァァァァァッッ!!」

「あぶ、ぐえッ!?く、首が折れッ、離し――――ああ!?転がってたベートさんが撥ねられたっス!?」

「アレまた死んだんじゃない!?」

「団長ォォォオオオオオオオオオオオオオオオオオオッッ!!」

『止まってエエエえええええええええええ!?』

土煙を巻き上げ、三人の影は遠ざかっていく。引きずられる二人の顔が折れそうな首を守らんと、苦悶と焦燥に死にそうな色に染まるのも気にせず、狂戦士（バーサーカー）さながらに瞳を血走らせたティオネは引き絞った弓弦より解き放たれた一条の矢となって、あらゆる障害を無視して疾走する。

全ては愛のために。全ては団長の貞操の為に。

愛する人とまだ見ぬ強敵の元へと、恋するアマゾネスはその脚を止めることはなかった。

「――――あぁあ！また、またぁ!!う、うううぅうううう……！許さない、認めませんからぁ…！」

尚、置いて行かれたエルフは、そのことに気付きもしていなかった。蛇足である。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「…今の雄叫び、アイズのところの人じゃないか？」

「ン、多分ティオネだと思う。」

「行かなくていいのか？なんか危ないとか…。」

「大丈夫。」

「……？」

「ティオネの恋はティオネの恋。自分の恋路を勝ち取るのも守るのも、いつだって自分だから。」

「ー……そうだ。うん、そうだった。」

「…ふぁ…。少し、寝てもいい？」

「うん。少ししたら起こすよ。」

「ありがとう。…ねえ、白野。」

「ン、何？」

「大好き。だからずっと、待っててね。」

「…ああ、勿論。」

「…えへへ、おやすみなさい。」

「おやすみ。」

深紅に染めよ（フラグ立てていこう的な意味で）

「団長！団長!!団長ォォォォォォォォォォォォォォォォッッ！」

ティオネ・ヒリュテは、迷宮のように入り組んだ路地の中を走り続けていた。あの後、すぐに後を追って暗い路地の中へと突貫した彼女だったのだが…端的に言えば、愛しい団長（フィン）の姿を見失っていた。何故か？それはつまり、団長本人からまかれたという事に他ならない。彼女に気付いた団長自身が、彼女を「不都合」と判断して引き離したのだ。

胸騒ぎが一気に強く、大きなものに変わっていった。ついでに引きずってるラウルとティオナは鼓動が弱弱しくなっていくのを感じていた。

何かある。走りながらも、怒り狂いながらも、彼女の思考は迫る脅威に対して冷静に思考を続けていた。

会いに行く相手に予想はついている。なんせずっと好いて惚れて食って抱きたいとか色々想ってきた相手だ。ずっと狙ってきた、ずっと見てきた、ずっとその心中を探ろうと観察を続けてきた。

だから昨日、例の「姉」とやらに強く興味を抱いた事にも、すぐに気が付いた。

誤算だった。こんなにも早く動くとは思っていなかった。意地でも阻止すべきだったと後悔するが、全ては後の祭りだ。今はとにかく、団長がたどり着く前に確保するしかない。さもなくば…「姉」とやらを、この場から排除するしかない。剣呑な殺意が牙をむいて、彼女の覇気より鎌首をもたげる。

恋は戦争だ。欲するものが奪われそうなら潰して排する。そこに戦闘員も非戦闘員もあるものか。

物騒な決意を抱きながら、ティオネはさらに速度を跳ね上げた。尾を引く雄叫びが、さながらのたくる大蛇の胴ように…どこまでもどこまでも後方へと残っていった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

最初(はじめ)は、もっと単刀直入にコトを告げるつもりだった。結局そうはならなかったけれど、僕は後悔はしないだろう。

…だってこの気持ちが、口にするのにもこんなにも勇気がいるのだと知れたのだから。勇者と呼ばれる、この身であっても。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

とりあえず僕がその少女に抱いた最初の感想は、「おいしそうに物を食べる子だな」というものでしかなかった。

「…むぐ、ゴクン。あー、バレちゃったんですか。だからあんなに吹っ切れてたんですか…。ベタベタに甘えてるんだろうなー…お姉ちゃんとしては時と場所くらいは弁えて欲しかったなー…。」

「発端は呑みの席でね。とはいえ、アイズは酒癖が最悪なのもあって一滴も呑んではいなかったから…多分「そのテの話題」では誤魔化したくなかったんだと思うよ。正直言って彼女は精神的には幼いから。純粋、といった方が正しいかな。」

後方から迫ってきていた見知った人物を引き離し、目的の少女と先日の事件の概要について話を弾ませる一方で、僕の胸中には別の思惑と、ささやかな疑問があった。

僕、フィン・ディムナには夢がある。それは何に替えても、果たさねばいけない夢だ。

それは失意と共に衰退しつつある我が一族の復興…実在しなかった小人族（パルゥム）の女神「フィオナ」に代わる光となる、新世代の「フィオナ」とも呼ぶべき子孫を残すという、僕にとって譲れない願い。かつて「勇者」の名に込めた、大いなる使命。

その為に、僕は純粋かつ善良な小人族の女性と子を生さなくてはならない。

「有名な「勇者（ブレイバー）」が土産片手に参上したのはそういう訳でしたか。…なら、弟（あいつ）はなんとかして神サマを説き伏せないといけないですね、大変だ。でもあんな可愛い子娶るとか羨ましケシカランから当然。苦労して勝ち取らせましょう。」

「…とはいえ、説得は多分至難の業だろうね。あの様子を見るからに、下手すると彼の話を聞いてくれるかも怪しいと僕は見てる。」

「最初から障害は覚悟の上でしょう、だからこそ今までは黙ってたワケですし。それに弟も私も、諦めだけは悪い方なので…きっと心配は要らないと思います。弟はアレで決断する時は間違わないですから。

選んだなら、後は手を伸ばして足を動かす。傍には頼れる「英雄」もいますから、転んだって心配はしてませんよ。」

だから僕は今日、話に聞く小人族の少女を見定めた上で、それが正しき者であるならば…すぐにでも「結婚（きけっこん）」を申し出るつもりだった。視察など、最初から口実に過ぎない。団長としては褒められた行為ではないが、これは僕が「勇者」として何よりも優先させ

なければならないコトだからだ。

…そう、だというのにだ。気付けば、僕は彼女…キシナミ・白夜と、思っていた以上に長く話を続けている。もう結構な時間、少なくともケーキを一緒に味わいつくす程度には時間をかけて話していた訳だが…こうして今も、本題を…僕にとっての使命を吐き出せていない。後方からまだ時折響いてくる雄叫びを考えれば、時間はあまり残されていないのに。

「信頼してるんだね。白野…弟さんの事。そしてアイズの事まで。」
「そりゃもう。ずっと一緒にいますし、あの二人が付き合うって聞いた時には最後まで祝福してやるって言ってありますから。…それに。」
「うん？」

何故だろう？さっさと切り出せばいいのに…そう抱いた疑問は、しかし程なくして氷解した。

楽しいんだ。この少女、白夜との会話は。この少女は平凡で、ごくありふれた少女の一人でしかないが…話しやすく、しかも不思議と心をざわつかせる。少しだけ、僕の心に納得と安堵が生まれた。

だがそれも、次の瞬間には大きく色を塗り替える。

「結婚とかって、それが困難でも出来るだけ大勢に祝福されたいじゃないですか。…自分も相手も皆で納得して、きっと全員で幸せになりたいものなんじゃないですかね？

…だって結局、本心ではどっちも好きなんだから。だったら、幸せになって欲しいじゃないですか。無理かもしれなくても。」

「――――――――。」

「私は恋とかまだしたことないけど…まあ女の子ですので、相応には憧れがあります。だからこれが、その憧れからくる理想に過ぎないんだとしても…あのアイズなら。そう思うんじゃないかなあって思うんです。

――――だったら。そうなれるように努力しますよ…今まで通り、あの二人ならね。」

思わず、心中を見透かされたかと思った。しかしそうではないとすぐに気付き…逆に、気付けたことに戦慄を覚えた。

平凡？我が事ながら、何を言っているんだと笑いたくなる。だが…少しだけわかった。

彼女は違う。他で見てきた、小人族（どうぞくたち）の誰（だれ）とも違う。

彼女は前を向いている。人からも、そして自分からも眼をそらしていない。挫折を知るが、諦めを知らない。どこまでも強固な鉄の精神が、輝きを持つほどに磨き上げられている。きっと僕は今、そんな彼女に惹かれ始めているんだ。

だって…今もこんなにも、アイズや弟の幸せを願う彼女は美しい。そして誠実で、真っ直ぐだ。

その想いが、すぐに僕に伝わるほどに。

「早い話が私も彼女たちが大好きなんです。だからもしかすると、偉そうに語ってなんですけど…単にそっちの神サマとかにも同じ気持ちになって欲しいだけかもしれません。」

「でもそこはそれでイイとも思ってます。間違いなく言えるのは、私は恋して愛を語れる彼女たちが羨ましいし、尊敬しています。何があっても、この人の傍で生きていたい…そんな「運命」を掴めたことに心から尊敬しています。」

「だからあの子たちが幸せを、愛し合うことを望むなら。ソレが彼らの望みなら…私はソレが叶うように、これからも全力で協力しますよ。最後の最後まで、神サマが相手だろうと絶対に。

まあ結局、好きな人のために必死になろうとするのは、私も彼女らも同じってことです。」

続く言葉(ほんしん)に、気が付けば僕の心は震えていた。「勇者」となる過程で、狂わず、しかれど感動もどこか薄れていった心に、大きな波紋が生まれた。この興味の、根源を僕は悟った。

――――彼女の立ち姿は、正しく僕が「こうあって欲しい」と願った「小人族」の姿だったのだ。どんな困難にも諦めずに前を向き、時に助け合い、自らの足で明日へと歩んで

いける。

彼女は夢にまで見た、僕の求めた「小人族（きぼう）」そのものだった。

「……？どうしました？」

アイズが言っていた通りだった。向き合うだけでも、こんなにも理解が出来た。澄んだ瞳の奥に覗く、輝きに見惚れた。

驚かされる。落ちるのも染まるのも、こんなにもアッという間なのか？この人の前では誠実でありたいと思ってしまう。この人を守りたいと思ってしまう。この胸に灯る熱い気持ちに、覗き込む彼女の視線に耐え切れず。気付けば僕は半歩ほどよろめいていた。

「だ、いじょうぶ。うん、ちょっと…感動しちゃってね。」

身体が熱い。顔が熱い。心が熱い。言い出すならば今なのかもしれないが、喉が干上がって言葉が出ない。

今回の出逢いは「大成功」であり、同時に「大誤算」だった。見つけた相手は、間違

いなく求めていた人物だ。他など到底考えられない。…だが思った以上に「極上」に過ぎた。容姿？勇名？地位？使命？そんなもので積みあがった自信を武器に、今ここで彼女に想いを告げろと？冗談じゃない。これ、そんなに安い感情じゃないだろう。

これは、もう疑いようもなかった。一体いつ以来か、それとも初めてなのかはわからないが———。

「団長!!」

そこまで考えて、身動きが取れなくなった所で、身体が宙に浮きあがった。

背中に伝わる豊満な感触。締め付けるように回された腕。聞き覚えのある声。予想はついたが、少し落ち着きを取り戻したかったこともあり、錆びつくような動きで振り返る。

そこにはやはり、想像していた通りの顔があった。

「…ティオネ…追い付いたのか。」

「そりゃあもう！愛しい団長の元へなら、どんなに離れて立って追い付けますとも！」

「ところで横で青い顔で倒れてるティオナとラウルはどうしたんだい？」

「どうしたんでしょうね？」

いつものような会話をしたことで、少しだけ心に余裕が生まれたのがわかった。まいておいてなんだが、ティオネに対して今までで一番と言っていいほどの感謝を心中にて捧げる。

だがホッと一息ついて視線を白夜に戻すと…彼女はなんだか形容しがたい顔をしていた。なんというか、ニヨニヨしている。別の意味で嫌な予感がした。

「…いや、これは違うんです。」

「いやあ、お熱いなって。」

「違います。ホント違うから、ゴメンちょっとティオネ下ろして。」

あらぬ誤解に焦りを覚え、急いで胸中から脱する。今しがた芽生えた感情がこんなことで潰えてはたまらない。非常に残念そうに僕の脱出を見つめるティオネに苦笑いをしながら、呼吸を整え、僕は白夜と向き合った。

その瞳を見つめ、跳ねあがりそうな胸をそっと一撫でして、一礼する。

「今日は、とても有意義に話せて楽しかったです。今度はお客として会いに行きます。」

「いえいえ、その時は御贔屓に。サービスしますよ。」

「サッ……コホン。いえ、ありがたいです。じゃあ、また。」

「あ、団長!…ホラさっさと起きろ二人とも! いつまで寝てんの!」

踵を返し、歩み去りながら…バクバクと鳴り響く心臓に、呼吸を荒くする。

危なかった。まさか「サービス」という言葉一つでときめくなんて。ここまで僕は初心(ウブ)だったのかと動揺する。路地の隙間から見上げた空は、見事な茜色からそろそろ夜天へと移り変わる頃合いだ。

ボンヤリと見上げながら、今の僕の胸中にある想いはただ一つだけだった。

――――明日、必ず来よう。そして…近い将来、必ず…。

そう思いながら見上げる空は、とても美しく思えた。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

帰り道。

「ヒッドイ目にあったっス…。」

「ホントだよ…うう、まだ首痛い…。」

「…悪かったわよ。でも余裕なかったんだから仕方ないじゃない。」

「仕方なくないよ！とりあえず今度奢ってよ、プレミアロールケーキとか！」

「賛成っス！」

「ぐっ…わ、わかったわよ！買うわよ、買えばいいんでしょ買えば！」

「よっしやった！」

「…そういえば団長。あのアイズさんの恋人のお姉さん、結局どんな人だったんすか？」

「あ、私も気になる。結局チラッと見ただけだったし…ティオネは？話したの？」

「してないわよ。というか、私としても団長がどんな話してたのか――……団長？」

「団長？急に立ち止まってどうしたんスか？」

「なんかちょっと変だよ？」

「……とても。」

『……？』

「と…とても、素敵な女性だった、ッよ…！」

……。

……。

……。

「ボハァ!?」

『ティオネが死んだァ!?』

皐月の風は頬を撫で（ファミリアに吹き抜ける恋愛風警報）

――幸せな一日だった。

夕食はとうの昔に済ませ、既に灯りを落とした暗い自室。アイズは普段の無表情もどこへやら、どこまでも満たされた表情でベッドの上で愛用の毛布にくるまったまま、何度も何度も繰り返し、そう思っていた。

今までのように周囲を気にせず、思う存分くっついて甘えることが出来た。膝枕に食べさせ合い、うたた寝から目を覚ましたら少し歩いて、時折じっくり抱きしめて…屋内であれば共に身体を横たえ、頭を白野に抱いて撫でて貰うということも出来たのだが、ソレは今までも時折してきたことだ。これからも出来る事なら、いくらでもできる。故に、新たに踏み出すことが出来た今日の一歩は大きかったとアイズは確信する。

…もう少し、早くバラシておけばよかったかな。そう思うほどに、幸せで満ち足りた一日だった。

だからこそ。明日からはいつものように迷宮（ダンジョン）に潜ろうと、アイズは心安らかな気持ち

で明日の一日を決定する。

黄金に煌く瞳に、強く鋭い決意が研ぎ澄まされていく。

眼を閉じれば、どこまでも幸せな「今日」が蘇ってくる。毛布の中で深く息を吸い込めば、ギリギリまで堪能し、身に染み込ませた白野の香りが胸を満たす。それはまるで白野に抱かれているかのようで、どこまでも深い安心感を得ることが出来た。この腕に抱いた小さな体の温もりがまだ残っている。頭を撫でて貰った心地よさだって鮮明だ。共に食べたジャガ丸くんの味は格別だった。

思い出す程に輝きを増すばかりの、小さな輝きたち。

こんな些細で、しかしかけがえのない積み重ね。この輝きを、幸せを守るためならば…私はいくらでも強くなれる。なってみせる。誰にも、何者にも負けはしない。アイズはそう強く思えるのだ。

かつてのような焦りはない。何故なら信じているからだ、最愛の人が自分の「強さ」を、帰還を信じて待っていてくれると。たとえどれだけの障害があっても、どれだけの時を経たとしても、アイズ(わたし)が帰るのはあの人の隣であり、白野(かれ)の隣は自分の居場所だと、お互いが信じていることを疑っていないからだ。

その信頼がお互いから消え失せない限り、アイズは白野の「英雄(つるぎ)」で、白野はアイズの「最愛(かえるぼしょ)」であり続ける。そう、そしてそれは、きっと永遠に。

嬉しくて、温かくて。…幸せで。どうしようもなく、好きなんだという事を再認識して。

やがてこの幸せな幻想（ヴィジョン）が、近い将来には消えぬ現実へと変わる日を夢見て。

いつしか満たされた多幸感に飲み込まれるようにして、アイズは深い眠りについたのだった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「いや、なんやこの状況。」

一組の愛が容赦ない猛威を振るい、遅咲きの一つの恋が生まれた翌日。「黄昏の館」食

堂に広がる光景を前に、「ロキ・ファミリア」の主神・ロキは、呆然と呟いた。
その姿を近くの席から見とめた朝食を終えたばかりのリヴェリアが、優雅に食後の紅茶を楽しみながらも声をかけてきた。

「ロキか。なんやも何も見ての通りだ、早く席に着くといい。」
「いや。いやいやいや。見てワカランから言うてんねやで？邪険せんと状況教えてぇなママ。」
「誰がママだ誰が。…仕方ない、出来る限り説明をしよう。ああ、その前に朝食は取ってきてからにしてくれ。」

落ち着かん。そう言われ、困惑を引きずりながらも言われるがままにロキは朝食のベーコンエッグ（ベーコンはカリカリと香ばしく、鮮やかな黄身が眩しい）を受け取り、その向かい席へと腰を据える。
その様子に納得し、リヴェリアは空になったカップを置いてロキを見据える。

「では、どれから聞きたい？」
「…どれ、っちゅーかなあ。アレしかあらへんやろ。」

「ふむ…。」

黄身をフォークで潰しながらロキが指し示す先に、リヴェリアが視線を滑らせていく。そこにはここ最近で見慣れたような、しかし見慣れない光景が広がっていた。

「……、……!!」

「……。……？」

視線の先には、ここから離れたテーブルで二人の人物が熱心に話し合いを続けていた。多少の距離があり、加えて少々の騒がしさもあって会話の内容はいまいちわかりづらいが、遠目からでもその真剣な様子だけは伝わってくる。そして、その組み合わせが些か妙だった。

片や「ロキ・ファミリア」団長、フィン・ディムナ。此方「ロキ・ファミリア」幹部、アイズ・ヴァレンシュタイン。どちらもファミリアの中では中心人物ではあるが、組み合わせとしてはあまり見ない組み合わせだ。ファミリア幹部の話し合いという感じでもなく、しかもどうやら必死そうなフィンに真剣ながらもどこか余裕を見せるアイズという、彼らを良く知るが故に、いまいち状況が読めない光景だ。

…そしてここまでならばまだ「珍しい」で済むのだが、その周囲があまりにも異様だった。というか死屍累々だった。

アイズのすぐ傍の床に倒れ伏す、同じく幹部のベート・ローガ。フィンの背後、更にやや数席離れた席で同様に沈むティオネ・ヒリュテ。アイズのすぐ隣で泣きながらも何事かを呟き、思い出したように（というかヤケクソ気味で）パンを齧るレフィーヤ・ウィリディス。誰も彼も「ロキ・ファミリア」の中では注目を集める人材なのだが、一様にこの世の終わりの如く消沈している。そしてその周囲で同じように落ち込んでたり、呆れたり、再起不能の彼らを介抱しようとしている人物たちが合わさる事で、もうちょっとしたホラーのような有様になっていた。話し合う二人が熱中してほとんど気にかけていないのも、拍車をかけている。

率直に言って混沌（ケイオス）だ。正直聞くのが怖くて仕方がないが、聞かないのもマズイ。

「なんやのんアレ。というかなんでフィンにアイズたん？ベートとティオネあれ死んでへん？」

「もういい加減慣れろ。ベートのアレは当分あのままだ。…フィンに関しては、先に私から口走っていいのか些か悩むところだが…。」

ため息交じりに、悩まし気にリヴェリアは口を開く。どうせ後で知ることになるし、下手すればフィンは当面の間かかりきりになるだろう。そう判断し、昨夜、ガレスと共に打ち明けられた「ソレ」を口にする。

「率直に言おう。フィンの「宿願」が見つかった。」

「見つかった…宿願…え、ウソ。マジで？うわちゃー…。」

ソレを聞き、ロキは一瞬戸惑うもすぐにその意味を理解し、なんとも複雑そうに声を上げた。誤魔化すように、整理するように、潰した黄身を絡めた白身をベーコンと共に咀嚼する。

フィンの「宿願」。それはロキも知っている、「勇者（ブレイバー）」の名に刻み込まれた唯一の願いだ。叶う見通しもなかった、遥か遠き理想の話。フィンを古くから知るものであれば、彼がその願いの為にどれだけの努力を重ねてきたかも当然知っている。…どれほど困難なもので、その裏で彼が密かに抱き続けた苦悩もまた同じくだ。

それが見つかったというならば、ロキからしても大変に喜ばしいことだ。それこそ今から一番イイ酒を開け、諸手を上げて祝宴を開きたいほどに。だがそれも、隣で死にかけているティオネを見てしまうと素直に喜ぶことも出来ない。フィンほどではないに

せよ、その熱愛、執着ぶりを近くで見てきたのだから。

「もしかしたら、いつかこんな日が来るかも…とは思ってたんやけどな～。」
「ティオネには申し訳ないが、な…だが受け入れてもらうほかない。私やガレスとしても、ぜひとも成就してほしいと思っている。」
「せやなあ。…アレ、というか成就ってことは、もしかしてフィンまだ告ってへんの？正直とっくに行動起こしてそうやけど。」
「それなんだがな…。」

空になったカップに紅茶を注ぎながら、リヴェリアは難しそうに唸る。首を傾げつつロキもまた食事を続け、ベーコンの最後のひとかけを口に運んだ。
咀嚼を続けて続きを待っていると、リヴェリアが重々しく口を開いた。

「フィンのヤツ、思った以上に本気になってしまったというか…まあ…。」
「本気？…え、ウソやろ？そんなに？フィンが？」
「初恋だ。しかもゾッコンというレベルのな。…すごかったぞ、あの惚気ぶりというか…幾つだと問いたくなるような純情ぶりは。もう使命とか二の次というレベルだ。」

「うわ！うわー！見たかった！なんやそれ、ウチ寝ててい っちゃん損してるやーん！」

リヴェリアの口から紡がれる、普段のフィンからは想像もつかない情景。見たかった、絶対に見たかったと悔やみながら、ロキは頭を抱え込む。二日酔いと一昨日のヤケ酒を心底後悔する様子を呆れたようにリヴェリアが見つめていたが、埒が明かないと話を続けた。

「まあ、そういう事でな。色々悩んだ末でアイズに恋愛相談を持ち掛け、あのザマという訳だ。」

「ぐ、ぐぬぬぅ…ま、まあ今このファミリアの中で相談するなら一択やな…ウチは絶対に認めてへんケドなァ！…というか、ならなんでベートまで死んでんねや。レフィーヤもやけど。」

「いい加減察しろ。アイズはアイズで相談には乗ったんだが、事あるごとに惚気るんだ。」

～ダイジェスト回想シーン　※音声のみお楽しみください～

『…そっか。フィンは、お義姉(ねえ)さんが好きになったんだ。』
『うん、で…だ。恥を忍んで相談に乗って貰いたい。彼女の事は君の方が詳しいというのもあるが…こう言っては何だが、君は僕からしたら「成功者」といえる。恋のね。』
『任せて。フィンになら、お義姉さんを任せられる。』

『団長、団長、団長ォ…私は、私はまだ…!』
『ティオネ!もう、もう聞いちゃダメだよ!また死ぬよ!?』
『るっさい!聞かなきゃ、聞かなきゃ敵情もなんも入らないだろうがぁ……!!』
『いや敵情って物騒っスね…。』
『…物騒ですって?ああそうだろ、いいか。戦争なんだよ。奪われる前に敵を潰すのは定石だろうが…!!あの、あの女ァ…!!私は認めない、団長となんて認めないからなァ…!』

『なんか別の何かに変化しそうだよティオネ!?殺気でフィンまで諸共イキそうだよ!』

『…お義姉さんが相手なら、とりあえず真っ直ぐ想いを伝えるのが一番早いかもしれない。』

『お、想いを…?』

『あの二人は直球で向けられる好意そのものには不慣れだけど、心から真剣に込められた想いがわからないわけじゃないから。戸惑うかもしれないけど、必ず真剣に向き合ってくれる。

…最終的なゴールは段階踏むにしても、まずは積極的に話していくのが正解。私もそうした。』

『…アイズ。君の具体的な実例を聞きたい。』

『？　…好きだって事あるごとに伝えたし、抱き着いたりとか。他にも…その、色々した。』

『なんっ…!!?』

『ア、アイズさん!?抱き着いたって、アイツにですか!?アイズさんから!?』
『…そうだけど。だって、白野にはそっちのほうが確実に伝わるから。買いに行くたびにしたよ。』
『あ、のチビ野郎ォ…!?』
『ううぅ…!!昨日、昨日に続いて…やっぱり許しません…から…!!』
『というか二人には関係ない。』
『ぐっ!?』
『はうっ!?』
『それと…もしも二人が白野に手を出したら、私が許さない。絶対に。
白野は私のかけがえのない人だから。二人も家族だから大切なのはそうだけど…白野はまた別。大好きな人だから。』
『――――ぐぎゃあァ!?』
『ああ!?ベートさんが死んだぁ!?』

『なるほど。…参考になる、が…情けないことに僕にはハードルが高い。』
『そうなの?』

『自分でも戸惑ってるんだけどね。こうまで…こうまで誰かに惚れこむことになるなんて思わなかった。』
『わかる。でも恥ずかしがる必要はないです。』
『…出来る範囲で、まずやってみよう。アイズ、君は今日迷宮（ダンジョン）かい？』
『ハイ。…午後は白野に会いに行くけど。たくさん撫でて貰うんです、また強くなったよって。それで、二人でジャガ丸くん一緒に食べます。』
『なら僕は午前中に向かおう。…とにかく会って、話してみる。そして可能なら…その、伝えてみるよ…ッ、この気持（すきという）ちを、ね…!!』

『――――か、ハッ……。』
『ティオネー!?やっぱり死んだー!?だから、だから耐え切れないって言ったのにィ…!!』
『愛、愛して、愛愛愛愛憎憎許殺――――……。』
『こわッ!?なんか怖いことになってるっスよ!?』
『どうすんのコレー!?』

～回想終了～

「という感じでな、少し抑えるようにはアイズに伝えておくつもりだ。因みに周囲の取り巻きは余波を食らった連中だ。」
「やっぱ許さんでキシナミ某イィィ！何ウチの知らんとこでアイズたんに愛囁かれとんねん、何抱きしめられとんねやクソガキァァ！」
「落ち着けいい加減、というかうるさい！食堂で神が叫ぶな！」

荒れ狂うロキに一喝し、苛立ちながらも音を立てずに、リヴェリアはカップをソーサーへと戻した。
既に紅茶は飲み干され、白い底が濡れて輝いている。僅かに残った紅い色味を見つめながら、締めくくるようにリヴェリアは続けた。

「そういう訳で死屍累々だ。これが、ここで起きた真実の全てだ。」

「納得はイカンけど…まあ理解はしたで。」

渋々ながらも状況を、事の顛末を知って不機嫌そうにふんぞり返るロキ。最後に残ったパンで黄身を拭い去り、むしゃむしゃと咀嚼して、ふと思い出したように口を開いた。

そろそろ席を立とうかというリヴェリアを呼び止め、ソレを口にする。

「でもなあ、結局誰なん？あのフィンをそこまで堕としこめた小人族（パルゥム）って。知っとる？まあ、どの道あとでフィンにはキッチリ問いただして祝うけどな。」

「…気付いていないのか？」

「へ、ウチの知り合い？なんか聞いとるとアイズたんも知ってるみたいやん。「お姉さん」なんて随分親し気なー…。」

リヴェリアの驚いたような視線に、ロキは意外そうな顔をするも…すぐに、背筋を走り抜ける悪寒に、その表情が凍り付く。

嫌な予感がする。アイズに親しい小人族、最近そんな話題（フレーズ）を耳にした気がする。とい

うか、ソイツのせいでヤケ酒をするハメになったんじゃなかったか？そしてソイツには確か姉がいて…フィンが、近々視察に行くと言っていた、ような…。

凍り付き、見る間に血の気が引いていくロキを見て。その心中を察しながらも、リヴェリアは真実（トドメ）の一振りを、容赦なく振り下ろした。

「名は、キシナミ・白夜。察しの通り、アイズの恋人の双子の姉に当たる。」

「…キシ、ナミ……。」

「言うまでもないが、所属は「アンリマユ・ファミリア」だ。まあ、頑張ってくれ。」

そう言うだけ言って、今度こそリヴェリアは去っていった。後に残されたロキは暫し呆然としながらも、脳内には禍々しい赤い布を頭に巻いた少年のような悪神が「いやーゴメンね？ウチのがさー二人もそっちの連中骨抜きにしちゃってさー。実際どんな気持ち？あ、でも俺はノータッチですんで！そこんとこヨロシク！」と舐め腐った顔でこちらを煽る様子が浮かんでいる。腹立たしさやら困惑やら何やらが色々と渦を巻き、そして今夜が「ガネーシャ・ファミリア」主催の『神の宴』の日だと認識したあたりで。

「もう、なんなんやぁ……。」

そう一言だけ残し、自らも崩れ落ちたのだった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

一方その頃。

「昨日は楽しかったか弟よ。随分イチャイチャしまくったみたいだけど。」

「…まあ流石に広まりますよね。」

「私は先に教えてもらったんだけどね。少し自重すべきじゃないかな、具体的にはアイ

ズの隠れファンからのヘイト値が不味いことになってそう。」

「人目を気にしろ、か。…多少誘導はするけど、最終的にはアイズの望むことをしてあげたい。俺だってアイズに幸せになってもらいたいし、他の人よりはアイズが優先だ。恨む人は、仕方がない。実際アイズは可愛いし。」

「うん、熱い。そして甘い。まああんな顔されたら断れないよね、わかる。でもあの格好で甘えてくるのはスケベすぎる気がする。けしからんもっとやれ。」

「なんてこと口走ってんのこの人ー!?」

「にしても恋かあ。こう言っちゃなんだけど憧れるなあ。」

「どうしたんですか、いきなり。」

「まあそういう話題が出てさ、私も女子だからね。憧れちゃうんだよ。」

開け、黄金の劇場よ（悪神登場前からグロッキー会場の暗喩）

「『神の宴』？」

「うん。ロキは行くって…白野の所の神様は来ないの？…はむ、むぐ…。」

「そういえば朝から姿が…でも、そもそも招待状が届けられるんだろうか。ウチのファミリアに…？」

日が沈みかけた、夕暮れ時。入り組んだ路地の隅、もうすっかり後始末も終えて撤収可能な状態になった屋台に響く、穏やかに弾む二色の声音。秘めやかな男女の逢瀬。

混雑時の待機所として屋台のサイドに常備されている、簡易な長椅子に腰掛けるアイズ・ヴァレンシュタインのそんな質問に対し。その膝に座り、抱きしめられながらアイズにジャガ丸くんを食べさせるキシナミ・白野の返答は、酷く悩まし気なものだった。

さくさく、ザクリという咀嚼音がやがて収まれば、少女の涼やかな声が路地を吹き抜

ける。

「そっか…わかりにくい所にあるからね、白野達「アンリマユ・ファミリア」の拠点（ホーム）。」

「それに言っちゃなんだけど、普段から拠点でゴロゴロしてるウチの主神様（アンリマユ）が宴目当てに外に出てる姿が想像できないから。基本的に外出る時は団長が料理当番で、麻婆豆腐とかラーメン作った時くらいだし。」

「それは仕方ないと思う。」

「…おいしいんだけどな…。」

恋人（アイズ）が自分達の好物をバッサリと脅威判定したことに僅かばかり肩を落としつつ、白野はジャガ丸くんが全てなくなったことを確認し、空になった大袋の包装紙を片手で器用に丸めて屋台脇のくず入れの箱へと投げ捨てた。

　やや名残惜しそうに先程までジャガ丸くんを与えていた方の手の指を、小さくはむはむと甘噛みするアイズの舌の感触にくすぐったそうにしながら…白野はボンヤリと、

『神の宴』と主神（アンリマユ）について考える。

『神の宴』。客商売という仕事柄、客の口から僅かに耳にしたことはあれど、その詳細について自分はあまり知らない。自由参加が基本だという神々主催の宴に、今まで我らが主神が参加したという話は、聞く限りなかったはずだ。

だが…だが、もしあの出不精な神様が、そんな聞くに煌びやかな、こう言っては何だが似合わない場に遊びに行くのだとすれば、それはどんな心境の変化だろうか？あるいは、どんな目的があっての事だろうか？そして考えた所で答えは出ない、そんなことはわかりきっているのに…わかっていて尚、何故自分はこうも考え続けているのだろうか？

それはきっと、自分達の存在が関わっているから。…そう、なんとなく思ってしまうのは、はたして間違っているのだろうか？

「白野？」

「ン、何でもないよ。暗くなってきたし、そろそろ帰ろうか。」

「…もう少し。」

「…うん？」

「もう少し、このままでいたい。ダメ？」

「…まさか。ならもう少し、一緒にいようか。」

帰ろうと言った途端に抱きしめる力が強まり、深く密着する互いの身体。耳元で囁かれる甘え声のオネダリを断れるほど、キシナミ・白野という男は聖人でも外道でもなかった。でもここにいない姉ならこの状況「正直たまらん」と胸に顔くらい埋めていたかもしれない。情けないことに、そこまでの度胸もまたなかった。

嬉しそうに甘えてくるアイズを甘やかしつつ、白野もまた自身の全てを委ねて眼を閉じる。人懐っこい子猫のように顔をこすりつけるたびに、アイズの長い金髪が白野の頬を撫で、ふわりと広がる甘い香りに蕩けそうな想いだった。

重なり合った二つの鼓動。二人はお互いの音に耳を傾けながら、自らの鼓動を強くす

る。求め合い、その生を最も強く感じられる距離。最も幸せで、安心できる距離。

互いの吐息を耳で味わいながら、徐々に下がっていく外気に対して二人の熱は上がっていく一方だった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「…あれ、やっぱり自重させとくべきですかね。ちょっと人目無視しすぎてる気がする。わざわざ戻ってきてまで見物したけど…ダメ、うん、見てて胸焼けしそう。」

「…うん。僕もその方がいい気がしてきた。明日にでも釘を刺しておこう。

……ところで白夜さん。ずっと見てるのも寒くなって来ましたし…その…ですね。…う、あー…と…!!」

「え？…あ、そうですね。なら一緒に食事にでも行きましょうか？」

「――――是非、是非とも。美味しいお店を紹介しましょう。」

「いや、何故にいきなり敬語に？…でも素直に楽しみで――――なんか今、すごい殺気を感じたような!!」

「気のせいです。大丈夫、必ず…必ず、貴女は僕が守ります。」

「え、それ絶対に気のせいだった時のセリフではない気がするんですが…!!？」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

『神の宴』と聞けば確かに華やかで荘厳な耳触りかもしれないが、結局は下界の人間が開く酒宴となんら変わらない。所詮は参加者全員が神である、というだけの話だ（それでも十分派手で荘厳ではあるのだが）。

開催日は自由。参加も自由。主催である神が集め、騒ぎたい神が集まり、一堂に会してしまえば、あとはイベントや祝い事などを肴に酒を呑む。料理を食らう。ただそれだけで、それが全てだ。

かつて娯楽を求め降臨した多くの神々を象徴するかのような、快楽を主とした人間の真似事行事と言えるだろう。

「……なんちゅうタイミングやろうな、実際。」

さて、今夜の『神の宴』は大手ファミリアの一角「ガネーシャ・ファミリア」が主催なだけあり、宴の規模は実に大きく、同時に集まった神々の数もまた膨大だ。

煌びやかなパーティー会場の中ではそこかしこで神が笑い、歌い、怒り、時には泣く。

酒杯（ゴブレット）が傾けば誰しもが顔が赤らめ、芳しい料理の香りは即ち食欲へと直結し、自然と手が伸びていく。そして訪れる神々の客足は未だ途切れず、騒がしく、賑やかで、なにより楽し気だった。

…が。そんな中で一柱、剣呑に神威を放ちながら戦に臨まんとする武士のような面持ちで、上等なドレスを身に纏う女神がいた。

「このタイミングで『神の宴』。まあ来てるかどうか知らんが、ガネーシャの事やから招待状自体は出しとる…ハズや。

来てたなら問い詰めてイッパツかましたる。場合によっちゃあ八つ裂きや。…来てなきゃそのままヤケ酒もええし、なんならそのままキシナミ・ブラザーズ…ンにゃ、ザビーズやったか？連中の情報集めたってもええな。聞けば人気店らしいし、何かしらあるやろ。…ケッ。」

もはや言う必要もないだろう、「ロキ・ファミリア」主神・ロキである。

ロキは無い胸の前で大仰に腕を組み、糸目を薄く開いて、しきりに辺りを見渡している。当然周囲の神から向けられる視線は白いなんてものじゃなかったが、対してロキは一切の反応を見せず、それどころか数歩進むごとに同じ動作を繰り返していた。

奇異なる行動の理由(もくてき)など、今更問うまでもない。ここ数日で急遽最大の怨敵に認定したクソッタレの三流最弱神が、万が一にも来ていないかを確認するためである。あわよくばブン殴ってやりたい気持ちなのは、事情を知らない人間から見ても察しが付くことだろう。

右を、左を、背後をと視線を巡らす。絶対に見逃すまいと記憶に残る、全身入れ墨姿の少年のような神の姿を探す。

…しかし改めて考えてみるまでもなく、ここはどこもかしこも神塗れであり、言うまでもなくパーティー会場は巨大なのだ。そして当たり前だが彼らも生きている以上はそこそこに動き回っているため、捜索環境として見つけにくく観察しづらい場であるのは火を見るよりも明らかだった。それでもロキは暫し必死に目を凝らし続けていたが、それでも目に付く景色の中に、求めた姿は見当たらない。

…やがてバカらしくなり、「いない」と判断してロキは方針を切り替えることにした。情報の収集と宴の満喫。この二つに的を絞ろうと決め、ロキは軽快な足取りで歩みだす。

まずは一杯をと適当なグラスを取り、誰から話を聞こうかと思っていると…、

「あーん?アレは…。」

目に付いた、凸凹並んだ三つのシルエット。見覚えのある顔はそれぞれ個性のあり、いずれも因縁浅からぬ相手ばかりだ。気の抜けない、気に喰わない、気の置けない相手という三種それぞれが集まるその一団を見て、ロキは調査の手始めには丁度いいと判断する。

余分な緊張も不要と脱ぎ捨て、大きく手を振り駆け出した。向かう先の面々へ自己の存在を主張するように、大きく声を張り上げる…無論、気に喰わない一柱に限っては、思いっきり挑発することを忘れずに。

「おーい！ファーイたーん、フレイヤ――！でもってぇ…ドチビィー!!」

張り上げた声に、振り返る面々。周囲からも視線が向けられるが、ロキの視線は目当ての神物（じんぶつ）たちに向いたまま固定されている。

気の置けない顔（ヘフアイストス）は、少しうるさそうにこちらを見やり。気の抜けない顔（フレイヤ）は相も変わらず穏やかに微笑みながら、こちらを見つめ。そして気に喰わない顔（ヘスティア）は――――

どういう訳だか、満面の笑みだった。

「…あ？」

怪訝そうな声が上がる。思わず足を止めたロキは、神違いか？と一瞬思うも、こちらを笑顔で待ち受ける神は改めて見ても間違いなくヘスティアである。

子供のような幼い顔立ちに、チンチクリンの背丈。…そして見ているだけで腸が煮えくり返りそうになる、たゆんたゆんと弾む大きな胸。こちらもあちらも互いに嫌い合う、いやいっそ憎み合う一歩手前と言っていいほどソリの合わない神・ヘスティア。正直アンリマユやザビーズの件がなければ、そのまま零細ファミリアの貧乏ぶりを肴にして嘲笑ってやろうと思うほどに大嫌いな神が…向こうからしても大嫌いなはずの自分の到来を、笑顔で迎え入れている。挑発されたこともなかったかのように。

不気味である。率直に言って気味が悪い。そして何だか寒気がする。近づいていいものか？ロキは嫌悪と警戒を隠そうともせずに顔をしかめながら、一瞬なかったことにして引き返すべきかと真剣に検討する。

だが…ここで引き返せば、それこそ自分が逃げているようにしか見えない。それはダメだと鋭く糸目を開き、ロキは覚悟を決めて、三柱の女神が集う一団へと足を進めた。

「やーやーロキ！待っていたよ！」

やがてこちらが十分に近づいてきたところで、実に晴れやかで希望に満ちた声がヘスティアから発せられた。喜色満面とばかりの様子にロキは居心地悪そうに、そして気味悪そうにしながらも向き合い、薄く開かれた瞳でヘスティアを睨みつける。

「なんや自分、ホンマにドチビか？なあファイたん、コイツ頭でもぶつけたん？それとももうベロベロに出来上がっとんのか？」

「お久しぶりね、ロキ。ヘスティアは…まあ、一応素面よ。」

「なぁに、今日のボクはちょっと機嫌が良くてねえ。…もっとも、君の返答次第ではもっとよくなるんだ！」

「意味わからんケドむかつくからそのツラやめぇや。何？こいつずっとこうなん？明日にでも終末（ハルマゲドン）でも黄昏（ラグナロク）でも起きるん？なあフレイヤ、自分からもなんや言ったってや。」

「…そうね。でもそれは、まずヘスティアから内容を聞いた方が早い気がするわよ？」

「…あん？」

そのフレイヤからの返答に、おや？とロキは首をひねる。別に返答そのものに問題があったわけではない。だが嫌悪と苛立ちに包まれた心境に、唐突に湧き上がった疑問が気にかかった…いや、それは疑問というほどハッキリとしたものでもなく、どちらかと言えば些細な違和感と言ったものに近かった。

興味が湧き、ロキはその違和感の主であるフレイヤを今一度見る。相変わらず同性であっても見惚れるほどの美貌に、浮世離れした心をざわつかせる微笑み。その表情や佇まいから心境を読み解くことは難しいが、それはいつもの事だ。なにも珍しくない。なにも珍しくないのに、気になった。

引っかかると、何かあるとロキは直感した。なにか鬱屈とした、不穏な感情がにじみ出ていた気がした。

「フレイヤ、自分――――。」

「さあ、さあ！答えてもらおうか確かめさせてもらおうかロキ！・さっさと答えるのが身のためだよ！」

「…ちっ。ハァ～、ホンマに空気読めんドチビやわぁ。鬱陶しいから答えたるわ、何が聞きたいんや。」

舌打ちし、違和感を晴らす質問を中断して、ロキは騒ぎ急かすヘスティアへと向き直る。面倒だし、はしゃぐヘスティアを見るのは面白くはないが、きっと相手にするまでこの神は邪魔をしてくるのが目に見えていたからだ。何を言いたいかは知らないが…まあ珍事には違いないかと、聞くだけ聞いてさっさと済ませ、フレイヤをもう少し探ろうとロキは考える。

応対したロキに、ヘスティアは待ちに待ったという様子で深呼吸をしていた。それをロキは黙って見ていたが…不意に訪れた、再びの、そして「確信」にも似た予感を伴う、より強烈な悪寒に身を硬直させた。

そして何とも間抜けな話だが。ここにきて漸く、ロキはその悪寒の「正体」というものに察しがついた。

「君の所（ファミリア）にいる、ヴァレン某についてなんだがね。ちょっと小耳に挟んだんだけどさ。」

そこまでヘスティアが口にした所で、ロキの癒えかけた心的古傷（トラウマ）が疼きを上げて警鐘を鳴らした。

何を口にしようとしてるのかまだ確証はない、だがマズイ。その名前はマズイ。今すぐ張り倒してでも黙らせろ、その先を語らせるな…そう幾多もの警告が浮かんでくるが、反してロキの身体は硬直してしまって動かない。それはまるで、見えざる白い手が無数に群がり、身体を押さえつけているようだった。

先程まで、まあ珍しいし鬱陶しいからということを理由に、呑気に話を聞こうとしていた自分こそ八つ裂きにしてやりたかった。警戒をもっと強めるべきだったと後悔するも、後の祭り。

そんなロキの様子を気にも留めずに、ヘスティアはトドメともいうべき話の続きを口にする。そう、「油断」と「慢心」が断罪の刃となり、牙を剥く瞬間がきたのだった。

「――――現在ベッタベタの熱愛中って真実（ホントウ）かい？」

「うィぎぃあああぁぁあああああッッ!!?」

思った通りの、思っていた以上の内容（ダメージ）が深々と突き刺さり。気が付けば、ロキは悲鳴を上げて膝から崩れ落ちる自分を自覚した。

ロキは思い出す。古傷というものは塞がってこそいるが、消えずに残った「治りがたい」、或いは「治りかけ」の傷であるということを。癒えぬソレが外から無理やり開かれると、とても痛いのだということを。

大切に育ててきたアイズが先の暴露会でウットリと愛を囁く姿。新妻スタイルでまだ見ぬ間男（はくの）に傅くアイズの姿。両手を繋ぎ、膝枕をし、寄り添い眠る二人の姿。それらの記憶と妄想をないまぜにしたものが、怒涛の勢いで鮮明に流れていく。やがてヴァージンロードを駆けていくアイズの後ろ姿を、泣きながら手を伸ばして追いすがろうとする自分の姿といったものまでがロキの脳内に広がっていった（あながち妄想でもないのだが）。

悪夢である。しかも大嫌いな、気に喰わない神の口から想起させられたことでダメー

ジは想定を遥かに上回るものがあった。耐えきれるものではなかった。

倒れ伏して、睨み上げたヘスティアの背後。涙で滲みそうになる視界、興奮して今もはしゃぐロリ巨乳神の背後に…ロキは見覚えのある、巨躯の神父が嗤う姿を幻視した。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「そ、その反応は…流石にちょっと予想外だったけど！真実とみて良さそうだねえロキ！ふ、ははッ…ハハハハハハッ!!」

一方、ロキを言葉一つで沈めた神・ヘスティアは、歓喜の高笑いを上げていた。実のところ倒れ伏すまではいかなかったものの、ロキ以外にも結構な数の神々…いずれも

「剣姫」のファンとして密かに活動していた男神らがダメージを食らっていたが、ヘスティアは気にする素振りさえ見せていない。

「ハシャギすぎよヘスティア。みっともない。」

「おおっと悪いね。でも生憎と目的の内の一つが見事解消されたからね。大目に見てくれよヘファイストス。」

「目的、ねえ。…まあ例の「噂」を確かめることを目的としてた神は、あんたの他にもいたでしょうけど。」

　隻眼赤髪の麗人然とした鍛冶神である親友の言葉に、ヘスティアは浮かれながらも謝罪した。その様子にヘファイストスは呆れたようにため息を零し、周囲を見渡すのだが…ヘスティアやロキが問題にならないほど、周囲は周囲で酷い有様だった。

『う、噂には聞いたが…マジか。マジかぁ…。』

『俺達の「剣姫」が落とされたとかウッソだろお前…。』

『そうはならんやろ。…なっとる？馬鹿野郎！馬鹿野郎ォォォ!!』
『そういや誰か賭けてたヤツいたよな。どうなった？』
『惨敗ですがなにか。』

みっともなく落涙する者もいれば地団太を踏む者もおり、がやがやと騒がしく、落胆したり逆に盛り上がったりする神々たち。ヘファイストスは嘆息しながらも「まあ無理もないか」と半ば諦めに近い形で状況に納得する。

この迷宮都市（オラリオ）において「剣姫」アイズ・ヴァレンシュタインの名は絶大だ。その剣腕からくる無類の「強さ」に加えて神々さえも魅了する美貌を併せ持つ少女は、娯楽や快楽に飢えた神々にとっても絶好の興味対象であり、また当然ながら人や神を問わず懸想する者も多い。そしてこれまで想いを伝えてきた者達が皆一様に玉砕してきたため、いつしか彼女は「みんなの嫁だから」みたいな扱いを受けるようになっていった。

…だからつい先日、「剣姫（アイズ）には実は想い人がいた」というニュースには皆、耳を疑った。

とはいえ迷宮都市を激震させながらも、最初は誰も彼もが信じられずにおり、拡散は静かで穏やかな、ごくゆっくりとしたものだった。だが後日甘ったるいデート模様を繰り広げていたという噂まで出回ると、噂はいよいよ信憑性を帯びていき、多くの神々も無視できない事態へと陥った。だから今回の宴には、その真相をロキに直接問う腹積も

りの神も多かったのだろう。

「でも、こんな形で聞くことになるとは思わなかったでしょうねえ…。」

「ふ、ふふ…大丈夫、大丈夫だよベル君。失恋が何だ、君は強くなれるさ。ボクが君の強さの活力になってみせよう。」

「あんたはいい加減戻ってきなさい。大丈夫？心はまだちゃんと地上にあるかしら？」

「お、おのれドチビ…ようも思い出させてくれよったのお…!!」

　トリップしているヘスティアをヘファイストスが見とがめ叩くのと、よろよろした動きでロキが立ち上がるのは、ほとんど同時であった。未だ涙目のままのロキは血を吐くような呪詛を吐きだしながら、一歩、また一歩とヘスティアに近づいてくる。それを見るヘスティアの眼は、正しく愉悦の色に染まっていた。

「いやあ、初めて君に感謝を捧げるよロキ！そしておめでとう！ヴァレン某には力いっ

ぱい祝福しておくと伝えておいてくれ！」

「どあほぅウチが認めるかい！というかなんや自分、まさかウチに嫌がらせするためにわざわざソレ聞いたんかぁ!?」

「失敬な、ボクはベル君の為に聞いたのさ。わざわざ嫌がらせ目的で君に宴くんだりまで会いにきたりなんかするもんか！

君のその貧相な胸のように貧相な発想でボクを語ってくれるなよ！まあ愉快だけどさぁ！」

「言わせとけばこのアホんだらァァァあああああああああああああああああああああああッッ!!」

売り言葉に買い言葉。不毛なる応酬はついに臨界点を迎え、取っ組み合いの喧嘩へと移行した。それを見た神々も先程のお祭り騒ぎもよそに新たなイベントに乗っかり、どちらが勝つかを賭けたり煽ったりしだす始末。いよいよ収拾がつかなくなってきた事態に、ヘファイストスは呆れを通り越してそろそろ帰宅を検討しだしていた。

「……、…そう。」

「…フレイヤ？」

ふと、すぐ隣から上がった小さな呟きに、ヘファイストスの視線が向き…ヘファイストスは眼を丸くした。

理由は単純、「美しかった」からの一言に尽きる。無論、フレイヤという女神は迷宮都市随一の「美の女神」である。故に美しいのはごく当たり前であり、今更驚くようなことではないのかもしれない…だがヘファイストスは、その時のフレイヤの姿に思わず見惚れた。そして、心底驚かされた。

どこか遠くに向けられた眼差し、悲しみをたたえた切なげな表情。恋慕を思わす桜を散らした肌のほの赤さは、白く輝くような肌を一層鮮やかに美しく飾り立てている。妖艶にして可憐、色香のみならず、思わず抱きしめたくなるような生娘の如きか弱さを思わせる。ヘファイストスの脳裏には無意識のうち「磨きがかかった」という、至極ありふれた、しかし適格と思えるフレーズが浮かんだ。

そしてヘファイストスに釣られるように、豹変したフレイヤの様子に他の神々も気付

き、一瞬で魅了されていく中。その視線を一身に受けながらフレイヤはグラスをテーブルへと戻し、一言「じゃあ、失礼するわ」と告げた。
銀に翻った髪を前にハッとヘファイストスは我に返り。ゆっくりと遠ざかる背へと、困惑気味に言葉を投げかける。

「あら、帰るの？」

「いいのよ。聞きたいことは全て聞けたから。」

「…貴方、誰からも何も聞いてなかったわよね？」

困惑を疑惑へと変えながらの問いかけに、既にいつもの様子に戻ったフレイヤは軽く手を振って応えた。そして一度だけ、周囲の空気の変化に取っ組み合いを中断したロキとフレイヤに、普段とは違った微笑みを向ける。
その微笑みに、当の二柱の神が目を瞬かせる中。フレイヤは静かに口を開いた。

「それに、ここにいる男はみんな食べ飽きちゃったもの。」

『『『サーセン。』』』

思わず呆気にとられるような言葉に追従するような男神達の言葉。それだけ言って去ろうとするフレイヤにヘスティアやヘファイストスが微妙な顔をし、ロキが思案するように遠ざかろうとするその背を見つめる。

その姿が、群れ成す神の中に紛れるように消えようとした。

「ヒヒヒッ、オレは食われた覚えはないけどねえ。まあ実際、腹壊しそうって話なら？全面的に肯定するしかないけどさ。」

そんな時だ。場の空気を読まずに、不躾な声が響いた。

誰もが、その声に、声の主に。足を止めざるを得なかった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

一方その頃。

「団長ォォォ!!…から!離れろ雌犬がァァァ!!」

「うおあああああああああッ!?なんか来てる、薄暗がりからホラーちっくに追ってきて

ます…!?」

「すまない身内だ！ティオネめ、こうまでなりふり構わずくるとはね…!!」

「あ、以前抱きしめてきてた非常にグラマラスな人？ああ…そっかぁ…。」

「重ね重ね訂正するけど違うから。そういう関係じゃないですから。とにかく、今は掴まって…!!」

「あ、はい。…でも今も正直しっかり掴まってるんですが。正直「お姫様抱っこ」というものの破壊力を身をもって体感している最中です。顔が熱いと言いますかですね…あ、いい匂いがする。」

「…すこしだけ感謝するよ、ティオネ。でも僕の返事はごめんなさいだ！」

「…逃がしません、逃がさない、逃がすかぁ！団長ォ！」

天幕の飾りとなれ（今後の甘さの為に犠牲になれの意）

「お～…ッくん、こりゃうめぇ！もぐ…いや、作って貰う身としちゃなんでもありがたくイタダキマスってーのは基本だけど…ンぐ。綺礼のアレは無理っつーか死ぬっつーか…。」

広大な宴の会場に響く、軽快に回る一柱の男神（オトコ）の声。別に大声を上げているわけではない。先程まで大いに賑わい、騒がしかった会場は、今や水を打ったかのように静まり返っていた。

原因は、わざわざ言及するまでもないだろう。

「ま、流石大手っつーのかね？人手とか色々…あーでも、こんな旨いモン毎日食ってたらオレってば結局死にそうだな。アレ、ほら、食いすぎとかで。

ヒヒッ、そうなったらいよいよもってギャグや落語の世界ですねえ！」

無言の神々の視線は、やはりその一柱にのみ向けられていた。会場の隅、白いテーブ

ルに腰掛け、ガフガフがつがつと料理を両手に貪る男神。その喰いっぷりに誰かが、或いは誰もが、「狗の様だ」と思った。

時折傾くグラスに揺らめく、血のように赤黒い葡萄酒（ワイン）がヤケに悍ましく見えた。

「…アレ、何この空気。オレ様ってばまさかの滑りですか？いやいや騒げよ、オタクらって娯楽目当てで降臨してきた、箸転がしても笑う類の連中でしょうよ。騒いで笑わなきゃ意味ないでしょうが。

ホラ。ホーラ！特にそこの二柱（ふたり）のじゃれ合いは一部じゃ名物なんでしょうが。オレもっと見たいなー！色々対極的だし眼福だ！」

軽薄に笑うその男神の、嘲笑っているようにも純粋に楽しんでいるようにも聞こえる声が、言葉が、静まり返った神々へと無遠慮に投げかけられる。

目立つ風貌の男神だ。そして言っては何だが、神威に脆弱（とぼしい）な神らしからぬ神だ。人間（ヒューマン）の少年のような姿、その服装は宴の場には到底似つかわしくない、襤褸のような赤黒い布を腰巻と頭に巻いている。全身の浅黒い肌を走る入れ墨はふと目を離すと形が変わっており、文字とも絵図とも取れそうなそれらは意味多様ながら、全て一つの概念のみを指し示しているのが神々には理解できた。

それは「悪」。全身に、この世ありとあらゆる「悪」を刻んだ男神。
そんな神を、その場に集まった多くの神々は一柱しか知らなかった。
古くから地上に在りながら、もう永く姿を見せていなかった神。
何故今まで気づけなかった、そんな思いもあり、驚愕と困惑、嫌悪の念に誰もが口を閉ざす中…その静寂は、やはり一柱の激する神によって破られる。
誰もが口を噤む中、溢れ出る激情を隠しもせず、彼女は…ロキは、その名を口にする。

「…アンリ、マユゥ…!!」

その言葉により、消え去っていたざわめきが、引き潮が戻るように再び場を満たしていく。その登場に立ち去ろうとしたフレイヤさえも、その表情を僅かに険しくし、向き直った。
ユラリと立ち上がり、一歩、また一歩とこちらへ近づいてくるロキの姿に男神…アンリマユは、その笑みを濃くして残りの葡萄酒を煽った。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「アンリマユ…おどれようも、ウチの前にツラァ出せたなぁ…!!」

「二ヒヒ。何、オタクってばオレ目当てだったの？いやあヤバイね、モテ期ってやつ？すぐに殺されて終わりそうな辺りがオレらしくて儚いっつーか笑えるっつーか。」

「じゃかあしいわクソ神がぁ！おどれ、自分の子にウチの子ちょっかいかけさせるたぁイイ度胸や…！」

「ン？なに、白野の方？それとも白夜？ヒヒッ、知るかよ。オレは生憎ノータッチさ。」

激昂するロキの言葉に幾度目かの動揺が会場を走り抜ける。それはつまり、「剣姫」の想い人…もとい恋人が、「アンリマユ・ファミリア」の団員であることを意味していた。その危険性を理解する神々は多くがロキに同情し、同じく何らかの企みを疑い、アンリマユに剥き出しの怒りを向けてくる。

…だが一部ソレとは別のショックと動揺を見せた者達もまたいた。それは「アンリマ

ユ・ファミリア」としての団員ではなく、白野と白夜を個神的に知る者達であった。というか端的に言って、彼らを狙ってたファンたちである。

「信じられるか！おどれぇ…タダで済むと思うなや…！」

「っつかオタク知らなかったのな。…ハハッ！つまりアレだ、オレ以上にオタクは信用されてなかったわけだ、自分の子供たちに。まあオタクも結局子供を信じちゃいないみたいだけど。」

「は……なっ…!?」

「絶句するところか？いやぁオレはイイと思うねえ、神より人間（おや）らしくて。我が子は自分に隠れて密会、下界エンジョイしてますって感じがするぜ。」

どこまでも楽しそうに笑うアンリマユの言葉に、ロキは憤りも忘れて一瞬たじろぐ。地上に降りて子煩悩になったロキの心を抉り、ざわつかせる言葉を吐きながら、アンリマユは葡萄酒を煽る。

グラスを置き、柏手を打つように、短く一回拍手をする。

「まあオレや他の連中への不信感もあるんだろうけど、あのアイズって嬢ちゃんなら熱心に語ったんじゃねえの？

白野がどういう人間か。主神（おや）であるオタクに嘘偽りなく。信じられなかったんだろ？」

「ぐ…ぅ…ああ、当たり前やろ…おどれが、おどれのファミリアで育った子ぉが。そない簡単に信じられるワケあるかい！アイズはただでさえ純真な子や、お気に入りや。心配して、誑かされたと思って何が悪いねん！」

「うーん、ごもっとも！いや実際オレだってそうするだろうさ。でもオタク、オレの子じゃなきゃ認めてたわけ？お気に入りお気に入りって言うけどアレじゃね、「ウチの子は嫁になんか行かせん」とか言ってたんじゃねーの？」

今度こそ、ロキは言葉を止める。容易く自分なら言い放つだろうセリフに糸目を見開き、何か自分の深い部分を見透かすように噛うアンリマユから後ずさる。

…そう、これだ。この誰よりも弱い神はどこまでも人も神も、善も悪も等しく笑いながら、予想もつかない言動で「悪」を成す。勝ち負けではなく、「禍い」をもたらす神だ。だから誰も、関わりたがらない。

周囲からの視線も感情も、等しく酒の肴の如く味わい、アンリマユは続ける。

「オタクの愛は伝わってたろうさ、身に染みるほどに。だからこそ隠してたんだろ。絶対反対されるってわかってたろうし、それでも恋も愛も捨(ハクノ)てたくなかったなら(カゾク)…まあ隠すしかないわな?」

「いやあ親だね。なんだっけ、親の心子知らずとは言うけど、アンタの場合は子供に心知られてたから信用されてなかったワケだ。だって実際まだ白野の事も確かめちゃいないわけだし。

それとも今夜でも粗探しするつもりだった?そりゃあ失敬、逃げるフレイヤ見逃して取っ組み合ってたからわからなかった。」

「で。タダじゃすまないって、ファミリアで戦争でもするのか?ヒヒッ、そりゃ結構、オレよりよっぽどらしい悪神だ。さあて、オタクの可愛い我が子たちはどっちの味方につくんでしょうねえ!誰か賭けるヤツいないのー?」

アンリマユの言葉が真実である保証はない。そうはならない、違う、信じていると口にすることは簡単だ。

…だが皮肉にも、ロキもまた「悪神」と呼ばれる神であり、アンリマユの吐く言葉に対しては否定できる材料も見つけられず、生来からの善心にも欠いている。何よりアイズの甘い白野への愛情を、つい最近嫌というほど聞かされている。そして団長であるフィンにも今朝がた、似たような兆候が見られたばかりだ。

ならば仮にここで戦争を仕掛けたら…そうでなくても感情任せに目の前のアンリマユを殴りつけ、その事を理由にアンリマユが戦争を持ち掛けたら…今度こそ自分は、最も大きな愛情と信頼を注ぐ我が子らを失うのではないか。

脳裏に浮かんだ最悪にも等しい光景に、ロキは思わず崩れそうになり、テーブルへと寄りかかる。既に残された手札はない…その事実に胃の腑が悲鳴を上げるのを感じながら、歯を噛み砕かんばかりに噛みしめ、アンリマユを睨みつける。

「アンリマユ…アンリ、マユゥゥゥ…!!おどれクソが、あ゛…アあ゛ああぁッ!!」

「ま、せいぜい頭冷やしてウチの子供たちを見極めてからにしなよ。オレじゃなくて自分の子供たちの見る目を信じてさ。
それにオタク、運が最高だ。あの二人の事なら一番正しく保障してくれる奴がここにいるんだからな。あやかりたい幸運ですねえ。」

どのクチが…そう言いかけた所でロキは言葉を飲み込んだ。溢れ出す激情にそっと蓋をして、ゆっくりと首を巡らす。
…アンリマユの言う神物には心当たりがあった。いや、というよりもソレは確信に近いものだ。この場において終始最も様子が可笑しかった上で、一番正しくという言葉を正確に実行できるであろう神物。そしてその真っ先に浮かんだ神物に対して、先程アンリマユは奇妙なことを言っていたと思い出す。
そう、たしか――――「逃げる」と。

「…フレイヤ。自分か？」

「……。」

名を呼ばれ、なお無言を貫く絶世の美に愛されし女神へ、無数の視線が向けられる。視線に晒されたフレイヤは銀に煌く瞳をゆっくりと瞬きさせ、ほう、と悩ましく艶めいたため息を零しすと、一歩前に進み出た。

ロキを一瞥し、そしてアンリマユを視界に収めずに虚空を見上げ、フレイヤは口を開いた。

「相も変わらず趣味の悪いことね…わざわざ私に、よりにもよって彼の事を、こんな場で語らせようとするなんて。」

「そういうアンタは諦めが悪い。ま、当方としましては大変に結構だと思われますがね。無理だろうけど…できればキアラにも見習わせたいくらいだ。その一途さはね。」

「その名前は口にしないでくれるかしら？思い出すだけで眼を潰したくなるわ。」

最上級の嫌悪と侮蔑を籠めて吐き出された言葉に、アンリマユはやはり愉快そうに笑って見せる。

キアラ。その名前に、イシュタルを始めとした多くの神々が、男女を問わずして反応

を見せた。畏怖、嫌悪、困惑、陶酔…ただ一人の人間の名前に、ある意味では一番大きな波紋が会場全体に広がっていった。それを無視して、フレイヤはゆったりと緩慢な動作でロキへと向き直る。

その表情にロキは再び驚愕した。切なげで、熱に浮かされたような…その美しくも儚き、表情に。

「…キシナミ・白野と白夜については、私が責任を持って保証するわ。この魂と「美」の名に誓ってでもね。

…でもそれだけよ。彼らについて知りたいのなら、貴女が自分で、自分の眼で確かめなさい。私の口からこれ以上は出したくないわ。」

「…どないしたんや自分。なんでそこまで…。」

「察して頂戴な。これ以上なんて…私、泣いてしまいそうよ。」

それだけ言い捨てるとフレイヤは踵を返し、銀の髪を背後に流しながら今度こそ会場を去っていった。その言葉に絶句した神々が左右に分かれて道を開く様は、さながら古

き時代の奇跡の一幕の様であった。
その姿を見送り、今度はアンリマユがテーブルから降りる。興味と警戒に尖った視線が、一斉にアンリマユへと向けられる。
穴だらけになりそうな視線を受けながら、アンリマユはやはり、空気を読まずに口にした。
「ンじゃあ食うだけ食ったし呑んだし、オレも帰るかね。そろそろ迎えも来てるだろうし。」
動揺が駆け巡る。アンリマユの言葉に、全員の視線が一斉に出入口へと向いた。先程フレイヤが出ていったその扉一つ隔てた先にいるという「迎え」…それが噂の中心にある人物たちなのか、はたまたあの二人なのか。興味と恐怖に身が竦み、固定化された空気の中で全ての行動が封じられる。
そんな中を、アンリマユは満足そうに歩いて行った。ほろ酔い具合で鼻歌を躍らせ、その足取りは軽い。
扉の前で一度だけ振り返り、白い歯を剥き出して笑いながら、アンリマユは手を振り、別れを告げた。

「それじゃあお先に失礼！皆様方におかれましては、どうかこの後も宴を存分に楽しまれてくださいな。お帰りの際におかれましては、どうぞ夜道にお気をつけて…ってね♪」

そして、会場から全ての「陽気」を拭い去り、久しぶりに現れた悪神は大いに爪痕を残し、悪夢のように去っていった。

因みにヘスティアの土下座はその後普通に実行されたという。色々状況についていけてなかったヘファイストスは思う所もあり、それを受諾したらしいが…この場合は蛇足である。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

悪神登場より半刻ほど前。「アンリマユ・ファミリア」拠点（ホーム）にて。

「弟よ。何も言わずにチャーハンでも作ってやってくれ…。」

「帰ってきていきなりどうしたとか色々言いたいけど…そちらはえーと、もしかしなくても「勇者（ブレイバー）」と…？」

「なんというか、嫉妬深いけど一途な女の子と言いますか…色々あって二人とも気絶したから運んできた。不幸な…不幸な事故だった…。」

「わかった聞くまい。なら二人分？それとも三人…？」

「私も食べたいから三人分。ちょっと色々疲れたから大盛で。」

「了解。ならすぐに作るよ。」

「ありがとう…それまでには起きると思うから。というか起きて貰わないと…お茶でも淹れよう。

…時に弟よ。イチャイチャするのは構わないけど、流石にあそこから更に先まではいっていないよね…？」

「…してない。誓ってしてない。え、というかどこから見てどこまで見て…？」

「え、膝に乗っけて抱きしめてた辺りまでかな。」

「ああ、なんだ…。」

「待て。何故そこで安心した？」

「…いや、流石にアイズの名誉にもかかわるから…。」

「貴様ら、お外で本当にどこまで行く気だ…!?」

見惚れよ（悪神のやらかした爪痕への皮肉）

「――――いい加減にしろこのバカ共が！さっさと扉から離れて、ついでにレフィーヤは握り込んだ武器から手を離せ！」

「だ、だって！あの麻婆男がアイズさんと、アイズさんの私室で二人きりなんて！もしもの事があったら大変じゃないですかぁ!?」

「確かに他のファミリアの団員と考えると少々問題はあるが、恋仲なら問題はあるまい。そも、今回は事情があっての「保護」、いわば特例処置なのじゃろう？団長（フィン）も許可しとる…それどころか、あやつからも皆に頼み込んだワケだしのう。」

「それにアイズさん相手だと、なんとなく心配してるようなことにはならなそうな…。」

「な…なな、なんで皆さんそんなに肯定的なんですか!?こうしてる間にも――――ハッ!!べ、ベートさん!!ベートさんは何処に!?」

「ああ、ベートなら…ここに縛り上げて転がっているのがそうだが？」

「ベートさぁぁあん!?」

「まったく…感情任せに、それも他所のファミリアの非戦闘員に襲い掛かるバカがいるか。いい機会だ、少しはその茹だりきった頭を冷やせ。」

「ががぁッ!!ごご…ががあッ!!」

「うわー…何言ってるかわからないのに、しっかり言いたいことだけは伝わってくるよ。というかスゴイ凶相（カオ）してる。子供見たら泣きそうだねー。」

「フン。アイズがどのタイミングで想いを告げたかは知らんが、少なくともアイズはお前のように燻ぶらせることはしなかった。そこまでこじらせたのは踏み出せなかったお前の「甘さ」こそが最大の原因だ。」

「ごッ!?」

「お前がどれほど納得していなかろうが二人は既に恋仲だ。アイズが自分で選んだ相手である以上、万が一ケガでもさせれば今度こそアイズは敵に回るぞ。」

「ぐ、ごごごッ…!!」

「…だいたいベート。お前は先日の食堂で、そしてその前にはあの酒場でもアイズの口から直接「ベートさんはゴメンです」と言われていたろうが。」

「ご、ぶ――――コフッ…。」

「ベートさんが死んだ!?」

「日課の域になってたね。」

「しかしこの様子だとロキが朝から外出していて不在だったのはせめてもの救いかのう

…む？というか、もう一人保護した姉とやらはどうしたんじゃ？中におるのか？」

「ああ…あっちはあっちでティオネに捕捉されていたが、すぐにフィンが間に入った。さっき覗いてみたが…今はどういう訳だか、料理対決をすることになっていたな。」

「フィンは審査員になっちゃってたねえ。でも料理って…ティオネ、もしかして昨日なんかあったのかな？。」

「ええ…いくらなんでも本職相手じゃ自殺行為じゃないっすか…？」

「ベートよろしく暴れられるよりは遥かにマシだ。丁度いい、昼食には少し遅くなってしまったが、折角だから我々もご相伴に預かるとしよう。無論レフィーヤも来い。拒否は許さん。」

「あ、そういえばお昼…でもあの姉弟の料理すっごくおいしいって聞いたよ！楽しみだね、その内弟君のも食べてみたいねー！」

「い、嫌です！いくらリヴェリア様のお言葉でも、私はここを――――ヒィ!?……う、うぅぅぅぅぅ…わか、わかりましたぁ……。」

「…うむ。わかってくれて何よりだ。ホラ、他の連中もさっさと行くぞ。」

「おー!!」

「うぅぅぅ…あ、アイズさぁぁあああん!!」

「…やっぱ美人っておっかないっすね。」

「リヴェリアは特にそうだのう。しかしまあ、今日ばかりは飛び帰ってきたアイズの方

が恐ろしく見えたわい。」

「…ですねえ。あんなアイズさん、初めて見たっス。…部屋の中で今、どんな風になってるんですかね…？」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

時間は少し、その日の朝まで遡る。

早朝、「アンリマユ・ファミリア」の拠点（ホーム）のリビングスペース。思えばそこが全ての始まりだった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「――――――……。」

「……、……。」

その光景を目にした時、姉弟、キシナミ・白野と白夜の動きは、確かに一瞬止まったという。

急激に喉が、瞳が乾いていくような錯覚を味わいながら二人の視線が向かう先。そこには三人の…一柱と二人の同胞が揃って座っていた。爽やかな朝だというのに心が死んでいくような光景が広がっていた。

酔い潰れて床に転がる主神なる悪神・アンリマユ（笑顔）。

朝の早い時間だというのに地獄のように赤い麻婆豆腐を汗だくで食いまくる団長・綺礼（笑顔）。

ツヤツヤしてるのにまだゴチソウ待ちみたいな顔してる出張カウンセラー・キアラ（笑顔）。

認識した直後、気が付けば思わず二人揃って両手で顔を覆っていた。そんなことをしたところで「ソレ」が直視しなくてはいけない現実である事は変わらないし、これから二人は朝の貴重な時間を迅速に動き、仕込みを済ませて出店しなくてはならない。だが今は、この瞬間だけは衝動のままにそうせざる得ない現実でもあったのだ。多くの神々でさえ耐えられないようなその光景を前に、直接叫ばなかっただけ、まだ二人は耐えられた方だと言える。

そう。二人の心中は、今この瞬間に完全に一致していたのだ。せめて声ならぬ叫びを、深々とした溜息として吐露する。

『（もうダメだ。なんかやらかしやがった）。』

それはもう「嫌な予感」などという生易しいものではない。「確信」だ。避けられぬ困難がこれから我が身に降りかかる。そしてそれを乗り越えなければならないという、そんな「確信」が二人には理解できた。

――――故に。通じ合った心のままに二人は、重なり合う溜息と同じくその視線を交わし、覚悟を固めて頷き合った。

「朝は、歩きながら食べよう。神サマは二日酔い確定だろうし、仕込みの合間でお粥かスープでも作っていこう。」

「ならそれは俺がやるよ。一応しっかり食べてはいるだろうから辛口のスープで…代わりに朝ご飯をよろしく。」

「任された。じゃあ取り掛かろうか弟――――ついてこれるか？」

「――――上等だ!!」

短く言葉を交わし、確信した困難を前に二人の一日は始まりを迎えた。朝の貴重な時間をこれ以上逃すことは出来ない、今日も変わらない…今まで以上の「笑顔」を届ける。その想いを胸に、気付けばその小さな身体は動き出していた。

どの道避けることは出来ない困難だ。だがそれは、つまるところ今までと何も変わらない。ならばこの二人が今更変わる道理もないのだ。進むべき道を決めたあの日から、折れることも諦めることもしないとこの二人は決めたのだから。

いや、そんな決意などなくても。「待ってくれている人達がいる」というだけで、この

二人が前に進む理由には十分だった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「お、お二方とも！もし！いや是非よろしければ改宗（コンバート）に興味はございません!?っつかもう辛抱ならねー！」

「何をたわけた事を…！前々から狙っていたのが自分だけだと思うな！是非とも我がファミリアに！」

「いやいやこんな料理上手はウチのファミリアにこそだ！ついでに『剣姫』も一緒に！」

「どうやってフレイヤ様を堕としたんだぁ!?」

「キアラさまは? いないの?」

「いいえ、私と結婚してください。二人同時でも構(むしろウェルカム)いません。」

――決意を固めて、屋台と共に拠点(ホーム)を後にし数分後。二人は道中の路地の壁際にて詰め寄られて…いやむしろ、追い詰められていた。固めた決意が早速崩れかけていた。

最早壁というよりは城塞の域に達しそうなほどの興味とか好意とかの視線と圧を前にして、二人は動けないでいた。急すぎる上に理解不能な展開に、珍しく震えさえ走らない程度には恐怖していた。

「…ナニコレ。」

「うん…なんだろねコレ。」

経験上、この姉弟二人にとって「追い詰められる」という状況自体はそう縁遠いもの

ではない。最近こそ殆どなくなったとはいえ、「小泰山（ザビーズ）」としてここまでの信頼を獲得するまでの最初期（あんこじだい）、あくまで二人は悪名高き「アンリマユ・ファミリア」の団員という肩書のみだったために、数多の悪意と敵意を向けられてきた。また子供だったとはいえ素性のしれない新参店舗（しょうばいがたき）として突如進出してきた二人は他の商業系ファミリアからのウケも良いとは言えず、評判が上がった今でさえも余計なトラブルを極力避けるため、出店場所は人気の薄い入り組んだ路地中でと決めているほどだった。

だからこそ敵意だの悪意だの警戒だのに対する耐性はあったのだが――――不慣れかつ意味不明な現状では、ソレが逆効果（マイナス）に働いていた。冒険者ではない二人は逃げることも敵わず、あれよあれよと追い詰められて、現在に至っている。

「今ほど冒険者でいたいと思った日はない…！というか最前列正面！あの狐耳のアレ常連さんじゃないかな!?」

「完全に理性が焼き切れた眼をしてらっしゃる…!!常連の中でも一番の良識枠だと思っていたのに…!?」

「というかどうする弟！もう後がないんだけど!!そろそろ向こうも雪崩れ込んできそう

な感じなんだけれども!!」

「…くれ…。」

「――――え?」

お互いでかばい合うように手を繋ぎ、身を寄せ合いながらの切羽詰まった白夜(あね)の声に白野は俯いたまま、何かを呟く。聞き取れずに見返し、そしてすぐに察して耳を塞いだ白夜の目の前で白野は構わず大きく天を仰ぎ、その小さな体に見合わぬ大きな声を張り上げた。

どうするか?その問いに、白野は咄嗟に思考してしまった己に対して苦笑いが浮かんだ。何も考えるまでもない。できることは一つだけだ。叫(よ)ばなくてはいけない、彼(おのれ)がキシナミ・白野であるのなら。その名は決まっている。

最も信頼し、自らを守護すると誓った愛しき少女(えいゆう)の名を。

「来てくれ!アイズーッ!!」

ビリビリと空気が震える。喧騒と熱気に包まれていた集団の声が一瞬にして静まり返り、天にまで届きそうなその叫びの僅かな残響が余韻として残っている。

そして。魂の底から籠ったようなその叫びに、呼びかけに。応えぬ「真の英雄（かれ）」ではない。

「――二人に、ナニをしてるの？」

一陣の風が、間を置かずに凛々しくも鋭く吹き抜ける。路地の石畳にさながら解き放たれた銀の剣が突き立つようにして、金色の『剣姫』が舞い降りた。

否、ソレは『剣姫』というよりも――

「私の白野に、ナニしてるの？」

――『剣鬼』といった方が相応しかったかもしれない。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

そしてアイズが無事に二人を「保護」し、現在。その先行きを危ぶまれつつも見守られていた自室の中で、二人はというと。

「アイズ…その…。」

「ダメ。まだ、離さない。…絶対に誰にも渡さない。白野も疲れてるし、このまま少し一緒に寝た方がいい。」

「俺は、アイズの元を離れないよ。」

「…うん。白野の事は信じてる。きっとこれからも待っててくれるし、ちゃんと私を呼んでくれた。でもダメ。まだきっと狙ってるヤツがうろついてるから、当分はこの部屋にいた方がいい。こうして抱き締めてないと安心できない。私は白野にも抱き締めて貰えるし、一石二鳥。」

「…いや、でももうお昼も過ぎちゃうよ？」

「夜、たくさん食べればいいよ？勿論、一緒に食べる。この際だから、そのまま皆に見せつける。」

「見せ…!?いや、え!?ソレつまり、このままの体勢で日常生活を…!?」

「？　そうだよ？」

割といつも通り、いつも以上に。色々と甘えまくっていた。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「……チクショオォォォオオオオーッッ!!いえ、もう一戦よ!次こそは勝つ!勝って見せるわ…!」

「流石に本業だから負ける気はしませんし、助けてもらったので作るのは構わないですけど…えと、食べきれます?皆さん。」

「メッチャおいしいから問題なし!まだまだイケるよー!」

「甘いものまで作れるとは…特にこの、春巻きだったか。濃厚で甘いカスタードに、酸味の強い二種類のイチゴが一緒に入っていてイイな。後口がサッパリして、この異国風のウーロンなる茶とも相性がいい…。」

「こっちの酢豚というのも良いのう!衣がフライとは違うのか?キメ細かでしっかりと硬いから、甘酢に浸されても触感が死んでおらん!バリっと砕けた後に口中に旨味が溢

れて酒も進むわい!!」

「た、確かにおいしい…あの、もしかしてマ…弟…さん、も、同じくらいの腕前で…?」

「マ?ああ、うん。基本的に同等の腕前ですよ、プロですし。」

「う、うううううううううううううーッ!!おいしい、でも認めたくないぃ……!!」

「…どうしたのかな…。あ、ディムナさんもお口に合いましたか?少し香辛料の抑えたマイルド版はそっちの皿にありますけど。」

「いや、すごく美味しいよ。そして不謹慎だが、こうして君の料理を存分に頬張れて僕は幸せだ。」

「…そうですか。うん、よかった。勝負の勝ち負け以上に、その言葉が嬉しいです。それにこちらこそ、姉弟纏めて置いて頂いてありがとうございます。後で弟にも…。」

「ははっ、気にしなくていいよ。本当に美味しくてそう…僕は、毎日君の手料理を食べたいくらいだ。」

「…う、え？」

『……、……え。』

「ガハァッ!!」

『ティオネも死んだぁー!!?』

惚れ直すがよい（誰かからの目線での発言）

『愛は求める心。そして恋は、夢見る心だ。』

かつての酒の席、たまさかに一夜を（性的な意味ではなく）共にした旅の作家は、私の零した悩みに対してそのように語った。

いやに酒精の強い酒を煽るその作家はどう見ても子供の姿をしていたが、それが何らかの呪いの賜物であることは見て取れた。なにより幼い美貌を彩る眼差しは愛への深い絶望と現実への嘲笑に満ちており、この私をしてその奥底を覗き込むことを躊躇わせたのが印象深かった。

氷のようにも鏡のようにも思わせる瞳がこちらを捉え、残酷なほど冷たく私を見つめていた。

『恋は現実の前に折れ、現実は愛の前に歪み、愛は、恋の前では無力になる。それが真っ当な男女の関係というモノだ。人ならざる神の心だろうが、その気があるならば忘れんで憶えておくと良い。

しかし誰が想像できた？誰よりも多くを貪った愛の女神サマとやらが、その実で恋も知らん初心だったとはな！ああいやすまない、決して笑いはすまいさ。貴様のその真摯さ、イジらしさは俺をして笑うには忍びない。だが生憎だったな、容赦なくその内ネタにはさせて貰うとも。せいぜい後悔しながらその時を悶えて待つがいい、黒歴史提供を心より感謝する!!』

彼（ハクノ）とはまた違う、私を直視して尚揺るがぬ魂。よくも恐れもせずによくも回る舌だと、終盤にはいっそ感心さえ覚えさせた、毒に濡れたナイフのように鋭い言葉。傷ついた私の胸の内を抉り出す言葉には、しかしこちらが痛々しいと感じるほどの真剣さに満ちていた。

背後に控えたオッタルが何度その剣を抜こうとしたことか。珍しいことにこちらが制止して尚、あの子はその怒気を鎮めなかった。作家が翌日に立ち去るまでの間、愛らしいあの子の指先がずっと剣の柄へと伸びていたことをよく憶えている。

そう、忘れるはずもない。あの日は、生まれて初めて私が「恋」を知った翌日の夜の話なのだ。

即ち――

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「……フレイヤ!!」

やたらドスの利いた呼びかけに、浮ついていた意識が浮上させられる。急速に輪郭を帯びて色彩の入る視界、反比例して消えていく過去の情景を見送りながら、視線を声の主へとスライドさせる。

そこには朧げな店内の明かりに照らされた、見知った友神（ゆうじん）の姿があった。

「…ロキ?」

「おうウチや。…大丈夫か自分?見た感じわからんけど、そないぎょーさん呑んでたん?」

「呑んで…ああ、そう。そういえば呑み直しにきていたんだったわね。」

怪訝そうな声音で探る様に尋ねられ、ようやく思い出す。どうやら酒精が回りすぎていたのは事実らしく、情けないことに、掘り起こした記憶は朧げでひどく霞がかかっているのが理解できた。

私――フレイヤはあの『神の宴』の帰り、その脚を己がファミリアの拠点(ホーム)ではなくこのＢＡＲへと向けたのだ。理由はあまりよく覚えていない。…或いはそう、宴の帰りによくないモノでも視たせいだろう。ともかく一人になりたかったのは確かだ。どこか一人で静かに、呑み直して酒に溺れたかったのだろう。そして呑んで頭を蕩かしている内に、気付けばあの過去の情景を掘り起こして浸っていたのだ。

そこまで思い返して、ふと気になる事があった。言うまでもない、油断ならない狐か何かのようにこちらを伺うロキの存在だ。彼女はいつの間にこの店に来たのだろうか。あまり回らない頭ではあるが疑問を解消しようと口を開こうとするものの、図らずもその疑問は口にするまでもなく。他ならぬロキによって解消される。

「もしかして昨日の晩から呑んどったんか自分?」

「ああ、そう。夜が明けていたのね…。」

事実として、どうにも呑みすぎた。そして浸りすぎたらしい。フレイヤはその事実を理解し、そしてそのらしからぬ女々しさを省みて、思わず頭を抱えた。

一体そんな真似をしたのはいつぶりだろうか、それこそあの時以来ではないか？どちらにせよ…まずはこの霞んだ思考を何とかしなければならないと思い至り、カウンターの向こうに立つ、豊かな白髭をたくわえた壮年の店主（マスター）へと向き直る。

「貴方も付き合わせてごめんなさいね、マスター。でも最後にお水と、なにか果物を頂ける？」

「滅相もございませぬ。訪れたお客様に寄り添い尽くす事こそが我が誉れであり、誇りです。しかれどこの身を案じての労いの言葉は感謝と共に受け取りましょう。

畏まりました、麗しき美神（フレイヤ）よ。ではカットしたオレンジをお出しいたしましょう。ロキ様は如何なさいますかな？」

「ン、ならウチにもそれ頼むわ。しっかしイイ男やわぁマスター。なぁなぁ、「ロキ・ファミリア（ウチのファミリア）」に来いひん？あの普段いる緑の兄ちゃん共々ごっつ歓迎するで!!」

「身に余る光栄ですな。しかしどうかご容赦を、智慧溢るる女神(ロキ)よ。かつてはどうあれ先も述べた通り、この場所に立つ店主(マスター)こそがこの老骨の最後の誉れ、終(つい)の居場所なれば。それにこの場を留守にしているあの男にも、まだ教えることが山とあります故に。」

「ちぇー、ツレへんなぁ。でもそこが素敵やで、マスター。ならもう一杯、なんか果物に合いそなの見繕ってや。」

「畏まりました。」

恭しく敬意を込めて、しかし厳格に一礼して注文(オーダー)に取り掛かる店主(マスター)。かつては名うての冒険者、狙撃の名手として名を馳せたという彼だが、その振る舞いには冒険者というよりも騎士を思わせるものがあり、神々の間では密かな人気を集めていた。

その実直な姿を眺めながら、二柱(ふたり)は暫しの沈黙に浸る。やがて注文された品々が音を立てずにカウンターに置かれると、それぞれ一口ずつを口にし、ようやくとばかりにロキが口火を切った。

「ウチがここで自分に会(お)うたんは偶然や。…けどま、ツラ合わせたなら聞きたいことも

ある。」

「…聞くまでもないけど、あの二人の事かしら。」

「まあ正解。まだ認めてへんけどアイズの恋人だとかいう白野と、フィンが絶賛してファイヤーしとるらしい姉の白夜。二人について、もちっとだけ聞いときたい。」

「その潔白、人間性については保証すると言ったハズよ。そしてそれ以上は自分の眼で確かめなさいとも。それ以上を語れというほどに貴女は無粋者だったのかしら？」

「ハンッ、散々色々食い漁ってきた自分が言うても響かんわ。まあ言うても？ウチかて別に自分の世にも珍しい失恋話を掘り下げに来たわけともちゃうよ。気にはなるけどな。」

　鼻で笑うようにフレイヤの言い分を切り捨てたロキではあったが、すぐにその笑みを消した。糸目は薄くだが開かれ、グラスからまた一口酒を啜り、訝し気に見つめるフレイヤを余所に、その心情を吐露し始める。

「――別にあのクソ悪神（アンリマユ）の戯言に従うワケやないけどな。ウチかて一門の主神（おや）や。だから考えた。考えて…ウチがそんガキを信じられんのは兎も角として、自分の子オは信じたいと思った。いや、なんと言われようが信じてやらなアカンとな。」

「…貴方…。」

「せやから自分の子供の選んだ相手なら、とりあえず信じたい。どんだけクソみたいな環境の中におったちゅうてもや。…ならどしたって、最後に確認するんはやっぱりウチや。ウチじゃなきゃアカンねや。だからもう、踏み入った話をしようとは思わん。」

「…そう。ごめんなさいね、ロキ。少し貴女を見くびっていたわ。それで？それならば貴女は私になにを聞きたいのかしら？」

フレイヤは態度を一変させ、ロキの言葉に耳を傾ける。ロキの言葉からは独占欲とは違う、成長した家族（ファミリア）への愛情が伝わってきたからだ。その美しき在り方に、フレイヤは敬意を払うことにしたのだ。

もっとも、成長の兆しがあの悪神（アンリマユ）である以上。あえて言葉にしようものなら機嫌を損ねることは間違いないのだが。

「聞きたい、というか。まあ確認や。」

「確認、ね。まあ、おおよそ理解はできるわ。貴女、あの子たちが得体のしれない存在じゃないかを危惧してるのね。器に満ちた水が澄んでいるかどうかではなく、その器にこそ異常はないのか…といった所かしら？」

フレイヤの言葉に、ロキは頷いてみせた。フレイヤはその疑問にため息を零すものの、無理もないかと納得してみせる。

あの神々さえも忌み避ける「アンリマユ・ファミリア」の厄ネタ三人に育てられて、真っ当に育ち切る小人族（パルゥム）。それだけでも十分な異常と呼べるのに、自画自賛にはなるが「最上位の美と愛の神からの寵愛」を跳ね除けるなど、前代未聞処の話ではない。いくら内面を保証したところで、その正体を得体の知れぬ存在と危ぶむのも無理からぬ話である。

だからこそ。フレイヤはロキのその誤解を、丁寧に解き解くことにした。

「…ねえロキ。貴女は自分の子供たちの偉業が誰かにマネできる代物だと思うの？」

「……あ”？」

ともすれば、ロキの自慢の冒険者達（こどもたち）を貶しているかの如き発言。途端に苛立つようなロキの声が、神威に滲んだ怒気と殺気と共に肌を刺すが、フレイヤは言葉を止めない。止めるわけにはいかないのだ。

敗れて尚、勝てぬと理解して尚も。彼女（わたし）はこの恋を抱き続けると決めたのだから。

「偉業。容易に成し得ぬこと…誰もが成しえなかったこと。人々が称え、神々が惚れ込む孤高の王冠（トロフィー）。彼らが、白野と白夜が為し得た事も本質的には変わらないわ。誰も為しえなかったことをしただけに過ぎない。」

「彼らは冒険者ではない。英雄ではない。当然、特別なスキルだって持ち合わせない…ただの小人族（パルゥム）の姉弟よ。どこまでも優しくて美しい輝きを持った、無二の魂を宿すというだけの普通の人間（コドモ）。他と何も変わりはしない」

「でも彼らは普通であっても平凡ではない、ソレを生涯で証明したわ。どんな汚泥の中でもその魂を曇らせなかった。どれだけの悪意が身を刻もうとも歩みを止めなかった。特別な事なんかない、彼らはただ「諦めなかった」だけ。どれだけ傷ついても立ち止まりそうになっても、後退だけはしなかった。しようとも思わなかった。」

「――――その鋼鉄の意志こそが、「神の愛（わたしのあい）」をも跳ね除けた。」

そこで一度、フレイヤは言葉を止めた。グラスに残った水を飲み干し、気圧されているロキにその眼差しを向けて言葉を紡いだ。

「私は白野を欲した。あんな綺麗な魂、一目見たら見惚れないわけがなかった。だから、そう。いつものように。いえ今まで以上に、私は白野へ愛を囁いた。彼を求めたの。何もかも満たしてあげたいと言ったわ、全てが欲しいと抱き締めた。」

「魅了は入っていたわ。彼の眼は私を捉えて離さなかった。脱力していたハズだった。でも、でも、でも――。」

「彼は、首を縦には振ってくれなかった。もう力なんか入らないハズの腕で、私を…愛を押しのけたの。」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

――俺は貴女のモノにはなれない。俺はまだ何も成し得ていない、何もやり遂げてはいない。

――冒険者にはなれなかった。だけど姉と二人で、この道を歩くんだと決めた。

――何もできないわけじゃないと足掻いて、選んだんだ。掴み取りたいって、思ったんだ。

――こんな俺を好きだと言ってくれる子がいたんだ。守りたいと、ジャガ丸くんをおいしいと言ってくれた子が。

――俺を、信じてくれた。俺が帰りを待っていると、信じてくれている。なら俺は、他の何を差し置いてもそれに応えたい。

――俺はもう、心に決めた人がいる。だから貴方には応えられない。ごめんなさい。

――でも、ありがとう。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「…誰も出来なかっただけ。誰も抗えなかっただけ。最初の一人が彼（ハクノ）だっただけ。彼とアイズ・ヴァレンシュタインとの間に芽生えていた恋が、神の、私の、フレイヤの愛を

も跳ね除けた。」

今も色褪せぬ、あの日の情景。彼の言葉。あの日、愛(フレイヤ)は恋に破れ、恋を知った。こんなにも切ないのかと思った。こんなにも苦しいのかと思った。…こんなにも美しいのだと知り、これは勝てぬはずだと思った。

ロキはそこまで聞くと、乾いた笑みを浮かべて天井を仰ぎ見た。涙を堪えているようにも見えたが、フレイヤは敢えてソレを口にしようとは思わなかった。

「それが事実として…もうウチ、どうしようもないやん。」

「でしょうね。でも…貴方の子供(アイズ)は最高の人を見つけた。彼を選び、選んだことこそ彼女にとって最高の偉業と言えるでしょうね。妬ましいほどよ。今は悩むしかなくとも、それでも貴女は決断しなくてはならない。彼を見て。向き合い、決めなさい。」

「複雑な気分や…。」

「誇りなさい…とは、とても言えないわね。でもいいんじゃない?人間(おや)らしくて素敵よ、

今の貴女。」

そう言って、フレイヤは酷くすっきりとした様子で立ち上がる。「ごちそうさま」の一言を告げると二人分としても尚余りあるだけの代金をカウンターへ残し、一礼する店主（マスター）とロキを尻目に出口へと向かった。

その背へ、ロキは最後に語りかける。

「なあ、フレイヤ。」

「なにかしら、ロキ。」

「自分、もうスッパリ諦められたんか？ガキ…いや、白野ンこと。」

その質問に足を止め、フレイヤは振り返る。妖艶に、淀みなく。

それはとても失恋したとは思えぬほどに美しく…しかしどこまでも「フレイヤらしい」、見る者を魅了する微笑みだったという。

「――ふふっ、まさか。」

それ以上を答えることもなくことなく、フレイヤは店を出る。軽やかな鈴の音が、静かな店内を短く木霊した。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

――諦めるはずもない。そう、私が恋をした人は諦める事だけはしなかった。しようとしなかった。

――今がダメでも、或いは天へと還った時。或いはもっともっと、別の機会を待てば

いい。

――今生は譲ってあげる。祝福はしないけれど、邪魔はしない。貴方達の魅せた恋は、とても美しかったから。

――何より、白野に嫌われたくはないから。

――今は涙を流そう。時には酒にも溺れよう。その上で、私は微笑もう。

――やがてこの恋を叶えるために。嘲笑われても、否定されても。私だけはこの恋の在り方を否定しない。

――私の心は未だ、叶わぬ恋に焦がれたままだ。